上田市文化財調査報告書第70集

宮原遺跡

緊急発掘調査報告書

1998.3

創価学会
上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第70集

宮　原　遺　跡

緊　急　発　掘　調　査　報　告　書

1998.3

創　価　学　会
上　田　市　教　育　委　員　会

序

上田市は長野県の東に位置し、古くから東信濃の中心地として栄えてきた地域です。古代においては、市域の東に信濃国分寺が置かれていました。また、その近くに信濃国府も置かれていたと考えられており、信濃国の政治・文化の中心でした。中世においても、後に塩田平は信州の学海と呼ばれるほどの学問の中心地であり、特に鎌倉時代には信濃国の守護所が置かれていたと考えられています。近世においては、上田城を中心として城下町が繁栄していました。上田は、このように古代から現代に至るまで、地域の政治・経済・文化を担ってきましたが、何故地域の中心として発展をしてきたのかを知る手がかりは有形・無形等の文化財及び埋蔵文化財によるところが大きいと思われます。

今回、上田市秋和地区において、創価学会上田平和会館建設工事が計画されました。同地籍は周知の埋蔵文化財包蔵地「宮原遺跡」に当たることから、工事に先立ち発掘調査を実施し記録保存をはかることにしました。調査の結果、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての住居址や中世建物址、土器・石器等が発見されました。

近年、本市で行われる発掘調査は、そのほとんどが開発事業に伴って実施されており、記録保存の後、工事により姿を消す遺跡が跡を絶ちません。埋蔵文化財は、文字の無い時代や文献史料等の少ない地域の人々の生活をうかがい知ることのできる貴重な情報源であり、私達の郷土の歴史を解き明かすかけがえのない財産であります。これらを生きた教材として社会教育・学校教育の中で活用してゆくことが、現代に生きる私達の生活を豊かにするものと確信しております。

最後になりましたが、厳しい寒さのなか発掘調査に参加して頂いた皆様、調査の実施にあたり御尽力を賜りました関係機関各位に感謝の意を表する次第であります。

平成10年３月

上田市教育委員会教育長　我妻忠夫

例　　言

1　本書は長野県上田市大字秋和字宮原に所在する宮原遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、創価学会上田平和会館建設事業に伴う緊急発掘調査であり、創価学会より委託を受け上田市（上田市教育委員会文化課）が実施した。

3　現地調査は1997年10月29日～1998年１月５日、整理作業・報告書刊行は1998年１月５日～1998年３月31日で行った。

4　本書の執筆・遺物観察は小笠原正が行った。

5　本書作成にあたっての分担は次の通りである。
遺物整理・復元：金沢修治郎、甲田五夫、鈴木義房、相馬敬子、高桑豊治、滝沢七郎
中島昭吾、保屋野友延、西沢　勝
遺物実測・拓本：上原祐子、川上けい子、高木めぐ美、田村雄二、横井順子
トレース：川上けい子、田畑しず子、保屋野道子、松野ひろみ、山浦幸子
遺構・遺物写真撮影：尾見智志、小笠原正
版組：尾見智志、小笠原正、松野ひろみ

6　現地調査における基準点測量およびトータルステーションを用いた遺構測量は株式会社協同測量社に委託した。

7　本調査に係る出土遺物、実測・測量図等は上田市立信濃国分寺資料館に保管してある。

8　本書の作成に当たり、ご協力いただいた機関
上田市都市計画課、株式会社ミヤノ

9　各遺構の略称は次のとおりである。
ＳＢ：竪穴住居址　　ＳＴ：掘立柱建物址　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝址

10　遺構実測図は原則として原図1/20、縮尺1/3である。

11　土器・石器は縮尺1/3を原則とした。拓本・銭は1/2を原則とした。

12　土器の実測方法は４分割法を用い、右側1/2に断面および内面を、左側1/2に外面を記録した。

13　スクリーントーンの指示は次の通りである。
遺構：焼土　　土器：赤色処理　　石器：磨面
炭化物集中部　　黒色処理

14　遺物番号は本文、出土遺物一覧表、遺構・遺物実測図、写真図版とも相互に一致している。

目　　次

序
例言
目次

第１章　発掘調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　調査日誌（抄） …… 1
　第４節　調査報告書抄録 …… 2

第２章　遺跡の環境
　第１節　自然的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3
　第３節　基本層序 …… 6

第３章　検出された遺構と遺物
　第１節　遺跡の概要 …… 8
　第２節　遺構および出土遺物 …… 8

出土遺物一覧表 …… 13
遺構・遺物実測図 …… 16
写真図版 …… 35

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

平成９年４月初め、上田市都市計画課から（株）ミヤノ所有の造成地に創価学会の上田平和会館が移転するとの連絡が入った。当該地区は周知の埋蔵文化財包蔵地「宮原遺跡」にあたるため、試掘調査を行うこととなった。４月20日に行った試掘調査の結果、造成等の影響で破壊が著しいものの、一部に遺構が残っていることが確認された。そのため、関係者間で保護協議を行ったところ発掘調査が必要であるとの見解に達した。

平成９年10月15日、上田市は創価学会と発掘調査委託契約を結び調査に着手した。

第２節　調査体制

教　育　長	我妻忠夫	教育次長	宮下明彦
文化課長	川上　元	文化財係長	岡田洋一
文化財係	中沢徳士、尾見智志、塩崎幸夫、久保田敦子、久保田浩、西沢和浩 清水　彰、小笠原正、望月貴弘（嘱託）、古野明子（嘱託） 松野ひろみ（嘱託）		
発掘・整理 作業協力者	一之瀬貞美、岡嶋庄平、酒井禮子、佐野和男、清水悦二、高桑豊治 滝沢七郎、竹内和好、中島昭吾、西沢貞雄、柳沢栄治 上原祐子、金沢修治郎、川上けい子、甲田五夫、鈴木義房 相馬敬子、高木めぐ美、田畑しず子、田村雄二、西沢　勝 保屋野友延、保屋野道子、山浦幸子、横井順子　（順不同）		

第３節　調査日誌（抄）

平成９年10月29日	仮設ハウス・トイレ設置
10月29日～11月28日	バックホーによる表土剥ぎ（延べ15日間）
12月５日	発掘機材搬入
12月９日～12月22日	遺構検出・遺構掘り下げ
12月22日	発掘機材撤収
12月22日～12月26日	トータルステーションによる遺構測量作業
平成10年１月５日	仮設ハウス・トイレ撤収
１月５日～３月31日	信濃国分寺資料館において出土遺物整理、報告書作成作業・刊行。

第４節　調査報告書抄録

ふりがな	みやはらいせききんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書名	宮原遺跡緊急発掘調査報告書
シリーズ名	上田市文化財調査報告書
シリーズ番号	第70集
編著者名	小笠原正
編集機関	上田市教育委員会
所在地	〒386-0025　長野県上田市天神二丁目４番74号 TEL 0268－22－4100　内線5122
発行年月日	1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
宮原遺跡	長野県 上田市 大字秋和	20203	76	36° 24′ 48″	138° 13′ 39″	19971029～ 19980105	1716 ㎡	創価学会 上田平和会館 建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮原遺跡	集落	弥生・古墳	竪穴住居址５ 掘立柱建物址11 土坑284 溝址７	弥生土器 土師器 須恵器 石器・銭	

第２章　遺跡の環境

第１節　自然的環境

上田盆地は長野県東部、千曲川中流域に位置し、平地面積はおよそ90㎢、全体として不規則なそら豆状の地形をしており、ほぼ現在の上田市域に重なる。中央を千曲川が流れ、盆地は大きく西と東に分かれる。

西部は川西地方と呼ばれ、北西方向に川西山地があり浦野川が流下する。その南は川西丘陵を挟んで塩田平が広がる。この周囲を塩田山地、独鈷山脈、小牧山系が取り囲み、これらの山々の水を集めて産川などの小河川が流れる。

東部は千曲川右岸にあたり上田市街地中心部を含む。市街地北側は屏風状に屹立する太郎山脈により区切られる。西から虚空蔵山（1,067m）、太郎山（1,164m）、東太郎山（1,300m）が聳え立ち、その南斜面は急峻で山麓線は塩尻岩鼻から上野方面まで直線的に平野部と接している。基盤は第３紀内

村層の緑色凝灰岩であり、その間に頁岩・砂岩層を挟むほか、閃緑ひん岩が貫入する。山麓には幾つもの扇状地が形成されており、最も大きいのは太郎山と東太郎山の間の谷を水源とする黄金沢扇状地である。これ以西は開析があまり進行しておらず、小扇状地または崖錐が形成されている。

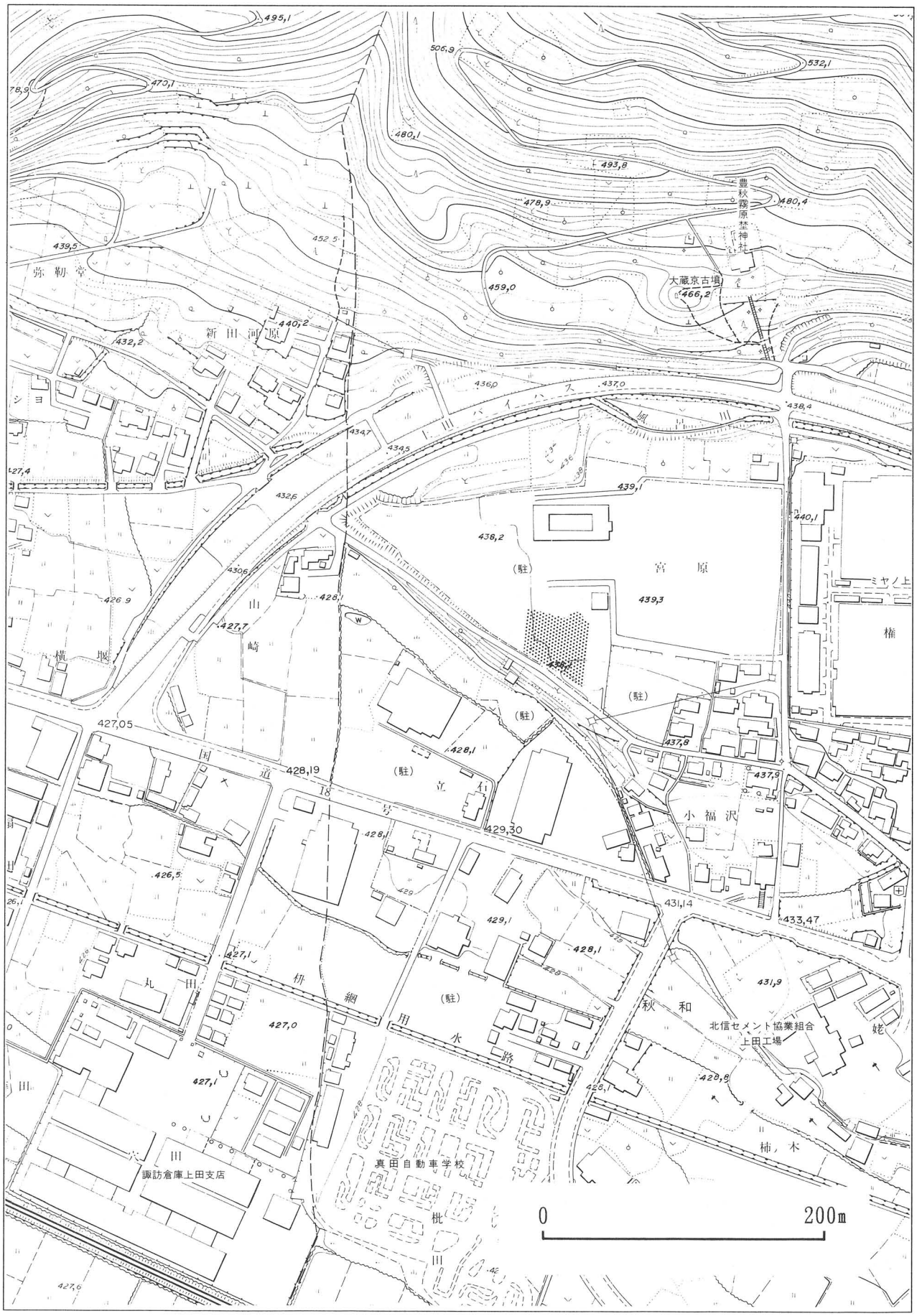
また、この千曲川右岸は河岸段丘が発達しており、国分付近では4段を数える。上堀地籍から下流では3段となる。第1段丘面は市街地東方の染屋台地、第2段丘面は現市街地が展開する平坦面であり、上田城はこの段丘崖を利用して築造されたものである。第3段丘面は千曲川の氾濫原であり現河床より若干高い。これらの段丘の地質は第1段丘面が染屋層と呼ばれており、上田盆地の地下一帯に広く分布している。下層は砂層・粘土層からなり、時折、礫層を挟む湖成層である。上層は主に礫層からなる河成堆積物である。この上の地表面は1～2mのローム層で覆われている。第2段丘面は千曲川上流から押し出された火山灰・角礫を含む泥流堆積物からなる。これは上田城跡南側の崖で観察される。

上田盆地の気候は塩田平の溜め池が示すように年間降水量 1,000㎜以下と少なく、国内有数の寡雨地帯である。

宮原遺跡は市内秋和地区にあり、先述の第2段丘面の西端に位置する。南と西は千曲川の段丘崖で直下に氾濫原が広がる。北は風呂川による第2段丘面の浸食で浅い谷を生じているため、一見、西方へ突き出た半島状の地形を呈する。また、この北側は虚空蔵山の南斜面が間近に迫っている。

第2節　歴史的環境

宮原遺跡の立地する太郎山山麓は千曲川右岸でも比較的遺跡の集中した地区である。ここでは特に黄金沢扇状地から塩尻に至る地域の遺跡の現状を取り上げる。この地域では旧石器時代の遺跡は未だ発見されていないが、縄文時代から中世に至る各時代の遺跡が確認されている。なかでも秋和・塩尻地区は古墳～平安時代にかけての遺跡が集中している。　縄文時代の遺跡は黄金沢扇状地西端の八幡裏遺跡が発見されている。このうち国立長野病院敷地内からは中期の加曽利Ｅ式土器、後期の堀之内・加曽利Ｂ式土器、磨製石斧、打製石斧が出土したほか、イノシシ、ニホンジカなどの獣骨も検出された。また、大星西遺跡でも中期の加曽利Ｅ式土器が表採されている。太郎山南斜面の虚空蔵沢沿いの山腹テラス状台地には上平遺跡がある。ここでは縄文中期の土器片が表採されている。平成4年、北陸新幹線建設に伴い発掘調査された弥勒堂遺跡では、中・後期土器、石鏃、打製石斧、石槍が出土した。宮原遺跡でも縄文前期の上原式土器、石鏃、打製石斧が出土している。　弥生時代の遺跡では八幡裏遺跡から中期の栗林式土器の壺が出土している。上平遺跡では昭和43年に畜産団地建設に伴う発掘調査で土壙から後期後半の箱清水式土器を出土した。その後、昭和58年にも高圧鉄塔の建設に伴い一部の調査が行われ、後期後半に属する住居跡やそれに伴う土器が検出された。また上平遺跡は一般の弥生時代遺跡と異なり水田耕作適地からかなり離れた山腹テラス台地にあることから、上小地区でも数少ない高地性集落として注目される。



495,1
506,9
532,1
470,1
480,1
493,8
478,9
480,4
豊秋霧原禁神社
大蔵京古墳
466,2
459,0
439,5
弥勒堂
新田河原
440,2
432,2
436,0
437,0
438,4
434,7
434,5
439,1
440,1
438,2
宮原
439,3
ミヤノ上
権
(駐)
427,4
432,6
430,6
428,1
427,7
山崎
横堰
427,05
428,19
国道18号
428,1
立石
429,30
小福沢
437,8
437,9
426,5
431,14
433,47
429,1
428,1
427,1
丸田
枡網用水路
427,0
秋和
北信セメント協業組合
上田工場
431,9
姥
428,8
428,1
柿木
真田自動車学校
諏訪倉庫上田支店
枇
0
200m
427,6

図1　宮原遺跡の位置

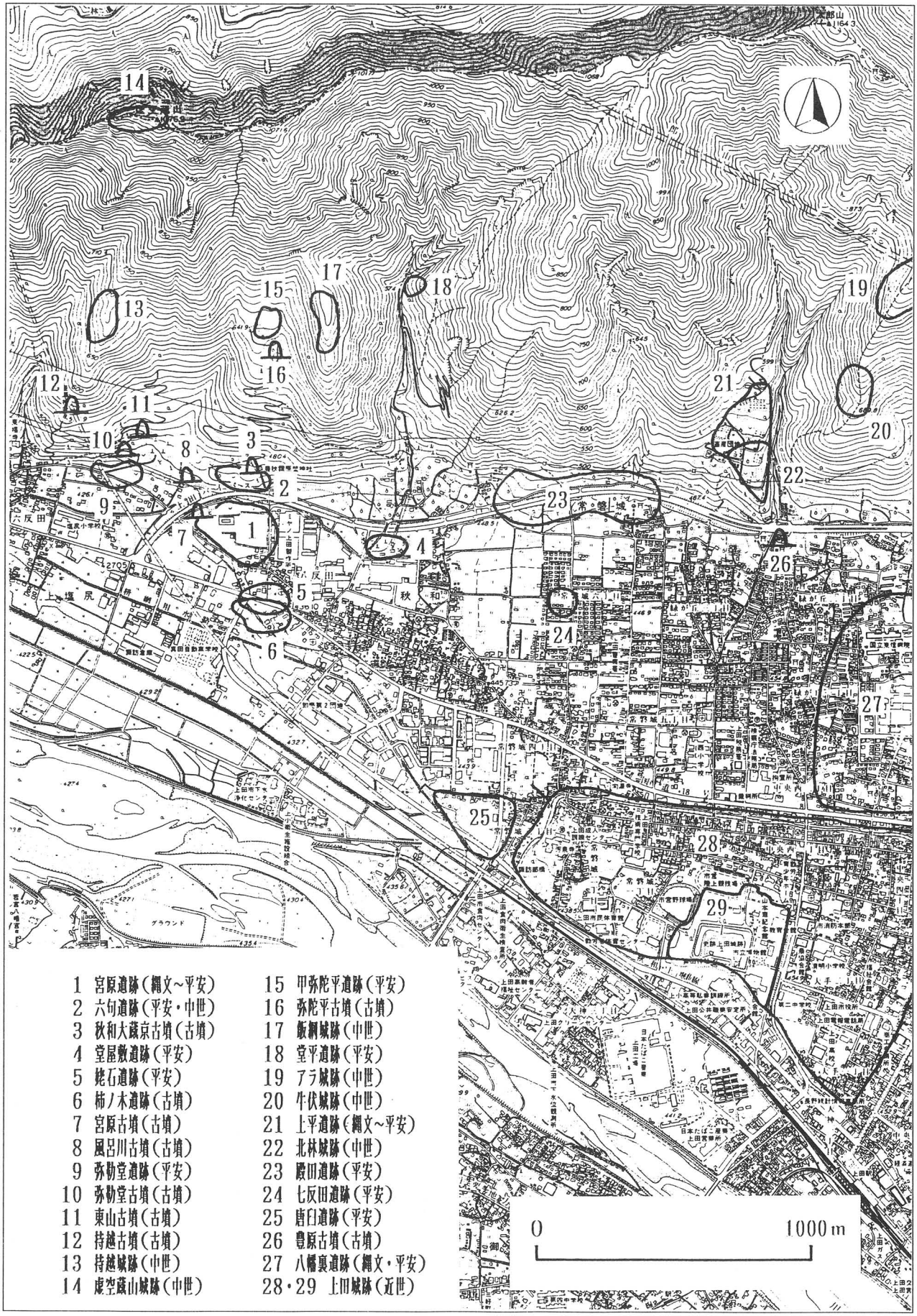

1 宮原遺跡（縄文～平安）
2 六句遺跡（平安・中世）
3 秋和大蔵京古墳（古墳）
4 堂屋敷遺跡（平安）
5 焼石遺跡（平安）
6 柿ノ木遺跡（古墳）
7 宮原古墳（古墳）
8 風呂川古墳（古墳）
9 弥勒堂遺跡（平安）
10 弥勒堂古墳（古墳）
11 東山古墳（古墳）
12 持越古墳（古墳）
13 持越城跡（中世）
14 虚空蔵山城跡（中世）
15 甲弥陀平遺跡（平安）
16 弥陀平古墳（古墳）
17 飯綱城跡（中世）
18 堂平遺跡（平安）
19 アラ城跡（中世）
20 牛伏城跡（中世）
21 上平遺跡（縄文～平安）
22 北林城跡（中世）
23 殿田遺跡（平安）
24 七反田遺跡（平安）
25 唐臼遺跡（平安）
26 豊原古墳（古墳）
27 八幡裏遺跡（縄文・平安）
28・29 上田城跡（近世）
0
1000m

図２　周辺遺跡分布図

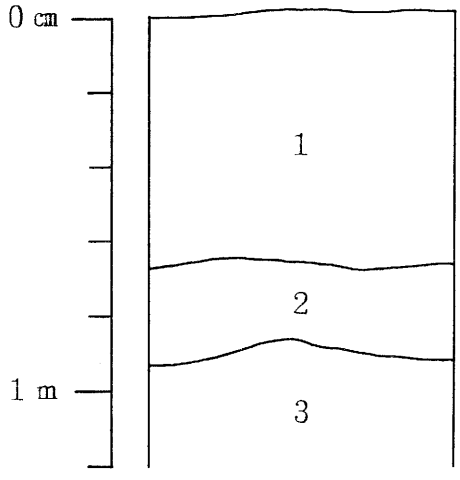
古墳時代の遺跡では八幡裏遺跡およびその東方の雁堀遺跡があり5世紀の土師器を出土している。太郎山・虚空蔵山南麓のこの一帯はまた多くの古墳が築造された。なかでも二子塚古墳は上小地方唯一の前方後円墳であり、黄金沢扇状地上の上田市街を一望できる場所に立地する。全長48mを測り北側には周湟と思われる窪みがめぐり、周囲には4基の陪塚と推定される円墳がある。墳丘に葺石は施されていないが円筒埴輪が出土しており、その特徴から6世紀前半とみられ古墳の築造も同時期と考えられる。

一方、秋和・塩尻地区には7基の古墳が知られている。このうち秋和大蔵京古墳は上小地区で最も古く大規模な墳丘を持つ方墳として知られている。昭和59年には筑波大学により詳細な実測調査が行われている。墳丘基底部は一辺32～35m、高さ5～8mを測り、周湟・周堤は存在しない。調査中には墳丘斜面で大型の有段口縁壺の口縁部が発見され、その特徴から本古墳の築造が4世紀末～5世紀前半と推定された。

また後期古墳はこの地区に6基確認されているが、現存するのは大蔵京古墳の上方、虚空蔵山中腹に立地する弥陀平古墳（円墳）1基のみである。他の5基はほとんどが破壊されていたが、そのうちの1つである風呂川古墳の一部が平成4年に北陸新幹線五里ヶ峰トンネル工事用道路敷設の折に調査された。かつて直刀が出土したと伝えられ、墳丘は全く失われていたが周溝の一部が確認され、溝底から土師器の高坏・坩などが出土したことから、築造は5世紀に遡るものと推定されている。

奈良・平安時代から中世にかけての遺跡は山麓一帯に広がり、遺物も多量に発見されているが、発掘調査があまり行われていないため詳細は不明である。上平遺跡では昭和43年の調査の折に奈良時代の須恵器窯1基が確認された。殿田遺跡からは奈良・平安時代の住居跡5軒とそれに伴う遺物が出土したほか、「和同開珍」が発見された。弥勒堂遺跡では小鍛治跡とみられる竪穴が検出され、鍛治炉・羽口・鉄滓などが確認されたほか、埋葬人骨を伴う4基の土壙墓も検出されている。さらに土師器・須恵器・灰釉陶器・中世陶器・銭貨も出土した。

第3節　宮原遺跡基本層序



1層　表土（ゴミの混じる造成用埋め立て土）

2層　褐灰色土（表土、シルト質を呈する。指頭大～拳大の礫を含む）

3層　黒褐色土（褐色土、褐色～暗褐色で1cm大の風化礫を多く含む。指頭大～拳大の礫を含む。）

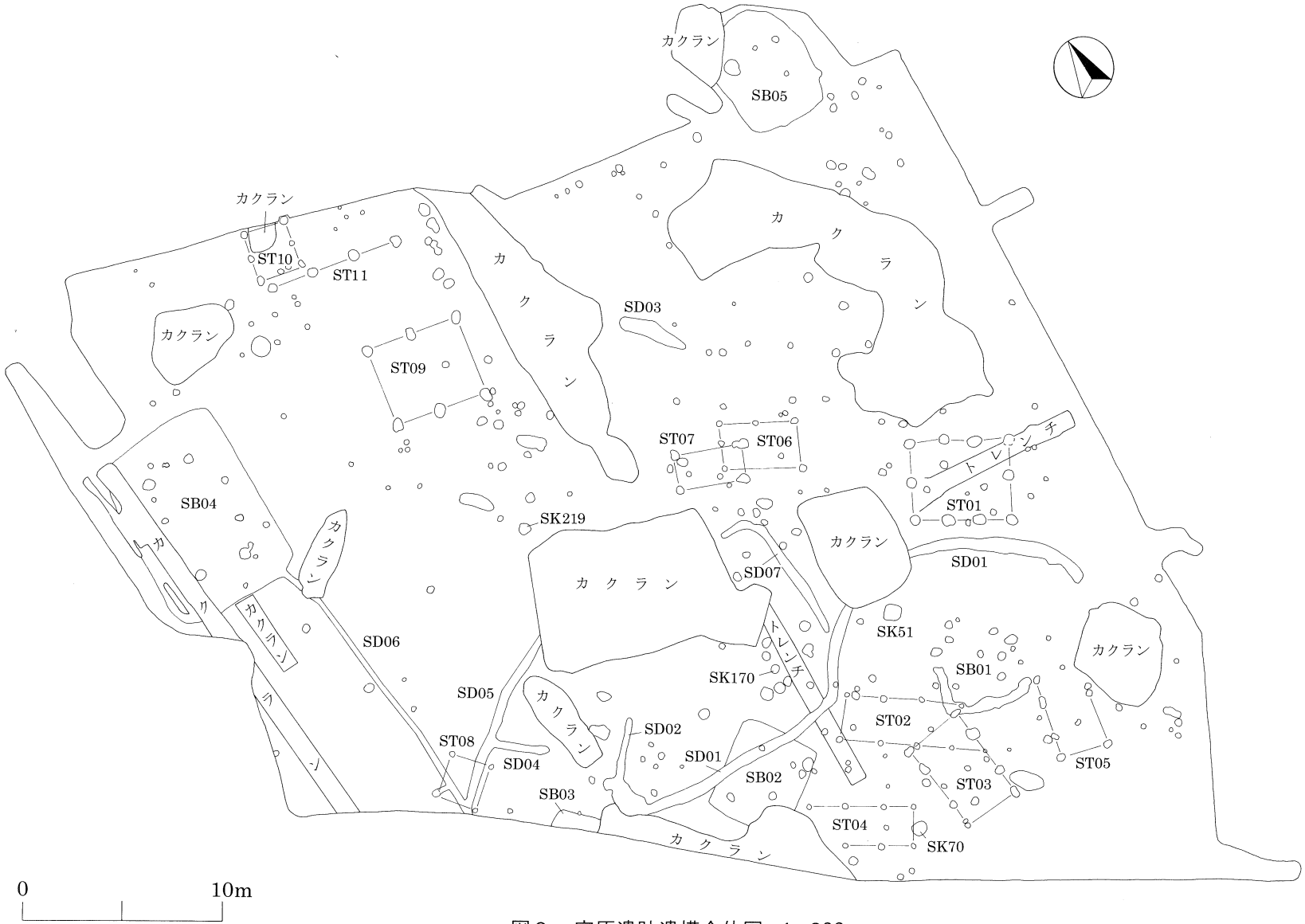


図3　宮原遺跡遺構全体図　1：300

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

今回の調査では平成９年４月に行った試掘結果をもとに1716㎡を発掘した。検出面までは、地表から1.0m～1.5mにわたり土砂が堆積し、上層は整地用の盛土で覆われていた。検出面は所々攪乱されてはいたものの、遺構は調査区全面に散在していた。出土遺構は竪穴住居址５、掘立柱建物址11、溝址７、土坑284であった。遺物はそのほとんどが箱清水式土器および土師器であり、弥生時代後期～古墳時代前期に属する。また奈良～平安時代に属する土器が若干と中世の掘立柱建物址から銭１枚が出土した。

第２節　遺構および出土遺物

（１）竪穴住居址

１号住居址（SB01）

検出遺構：調査区南東に位置する。北側は削平され失われている。平面形態は隅丸正方形または隅丸長方形と見られる。南西隅でST02、03に切られる。覆土は小礫を含む黒褐色土である。貼り床はなく地山を堀込み直接床面としている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝が南側から西側にかけて巡る。覆土下より検出されたＰ１～Ｐ４が柱穴と見られる。Ｐ３からは箱清水式の壷の胴下部(1) が出土した。この北側には土坑が散在するが本住居址に属するものかどうかは明確にできなかった。炉は確認されなかった。

出土遺物（１、２）：箱清水式の壷胴下部(1)、甕、高坏(2)、奈良～平安前期の坏、須恵器片が出土した。

時　　期：坏、須恵器片は検出面の出土であったことから、後世の混入と判断した。出土土器から弥生後期に属するものと推定される。

２号住居址（SB02）

検出遺構：調査区南部中央に位置する。全体的に削平が著しく、南側は攪乱により失われている。平面形状は隅丸正方形で、東西5.0m×南北4.1mである。北寄りでSD01に切られる。覆土は褐色土(10YR4/4) を含む黒色土(10YR2/1) 一層である。貼り床はなく、地山を堀込み直接床面としている。壁は削平が著しく僅かに立ち上がりが見られる程度である。周溝は西側を除いて全周に巡り、幅11～26㎝である。Ｐ１～Ｐ６のうちＰ１・Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６は主柱穴と見られる。床面からは炭化材が出土した。炉は確認されなかった。

出土遺物（３、55）：土師器壷(3)、ハケ調整の土師器甕片(55) のほか、Ｓ字状口縁台付甕の小破片を含む箱清水式期～古墳初頭の遺物が出土した。

時　　期：出土遺物から弥生後期末～古墳初頭に属するものと推定される。

3号住居址（SB03）

検出遺構：調査区南西部に位置する。東側は攪乱され残存しない。また遺構は調査区域外へ延びている。表土剥ぎの段階で遺構であるとの認識ができなかったため、覆土の大半を失った。調査区域境の土層断面観察によると、覆土は黒褐色土(10YR3/1) の一層、厚さ25～40cmで壁は傾斜しながら立ち上がる。周溝は壁面に沿って巡り、幅34～66cm、深さ6～8cmである。

出土遺物(56、57)：箱清水式の甕片(57)、ハケ調整の土師器甕片(56) が出土した。

時　　期：出土遺物から弥生後期末～古墳初頭に属するものと推定される。

4号住居址（SB04）・6号溝址（SD06）

検出遺構：調査区西部に位置する。西側は一部暗渠によって破壊されている。平面形態は隅丸長方形で東西6.8m×南北9.5mである。覆土は黒褐色土(10YR3/1) の単層で、褐色土(10YR3/1)、黄褐色土(10YR5/8)、礫、少量の炭化物を含む。床面は褐色土(10YR3/4) を多量に含む黒褐色土(10YR3/1) を堅く叩き締め、貼り床としていた。床土の厚さは5cm程度である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。地床炉は北側と東側で検出された。北側の炉址は隣接して灰・炭化物の集中が見られた。ピットは12基検出されたが、うちＰ１・Ｐ５・Ｐ８・Ｐ11は主柱穴、Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ９・Ｐ10・Ｐ12は補助穴と思われる。Ｐ７は壁側に外傾する。出入口に関係する施設か。周溝は住居址を全周し、南側やや東寄りで一部内側へ張り出す。SD06とは南東隅で接続する。SD06は本住居址周溝の屋外施設と考えられ、直線状に延び調査区域外の千曲川段丘崖へ続くものと推定される。このことからSD06はSB04付属の排水施設の可能性がある。

出土遺物(４～19、58、59、66～70)：箱清水式の壷(19)・甕(４、５、６、８、９、10、11、12)・高坏(13、14、15)・鉢(16、17)・小型甕(7)・土製円板(18) が出土している。石器は磨石(66)・棒状礫(67、68)・敲石(69)・砥石(70) が出土した。また、東海系のＳ字状口縁台付甕の小破片(58) も出土したが混入物と解釈した。

時　　期：出土土器から弥生時代後期と推定される。

5号住居址（SB05）

検出遺構：調査区北東隅に位置する。北西側は一部攪乱で破壊されている。平面形状は隅丸長方形に近い不整形で、東西4.7m×南北6.1mである。覆土は黒褐色土(10YR3/1) 一層で、拳大～人頭大の礫および土器片を多量に含んでいた。出土状況からこれらの礫および土器片は投棄されたものと思われる。床は一部強い粘性を有する黒褐色土で貼り床されているほかは、地山を堀込み直接床面としている。壁は傾斜しながら立ち上がる。地床炉は北側で検出され、炉内には壷底部を利用した炉胎土器がみられた(24)。Ｐ１・Ｐ２は主柱穴と思われる。Ｐ３は径88×72cm、深さ20cmを測る。

出土遺物(20～46、60、61、71、72)：土器片は検出面から床面にかけて多量の礫に混在していた。箱清水式土器が比較的まとまって出土しており、壷(20～24)・甕(25～36、60、61)・高坏(38～40)・鉢(41～43) が見られる。このほかに、高台状の高まりを有する土器底部(甕か？・44)・土製円板(46)・古墳初頭の小型器台(37) も出土している。石器

は偏平礫を使用した砥石(71、72) が出土した。

時　　期：覆土内出土土器の特徴から弥生後期末～古墳初頭に属するものと推定した。また、住居址の所属時期も覆土内出土土器が示す年代とほぼ同時期と思われる。

(2) 掘立柱建物址

1号建物址 (ST01)

検出遺構：調査区東部中央にある。2間×3間の長方形を呈し、規模は梁間4.0m×桁行4.8mである。P6で柱痕が検出された。P3・P4で柱の建て替えが行われている。

出土遺物：箱清水式期～古墳前期の土器片が出土している。

時　　期：柱穴の規模・形態および出土土器から弥生時代後期～古墳時代前期に属するものと推定される。

2号建物址 (ST02)

検出遺構：調査区南東に位置する。SB01を切る。ST03とも切り合うが前後関係は不明。1間×4間の長方形を呈し、規模は梁間2.3m×桁行7.3mである。

出土遺物：P6から縄文土器片、須恵器片が出土した。

時　　期：出土土器は混入品と解釈した。柱穴の規模・形態からST03、04、05とほぼ同一時期と思われる。ST03が中世と推定されることから本址も中世に属するものであろう。

3号建物址 (ST03)

検出遺構：調査区南東に位置する。SB01を切る。ST02とも切り合うが前後関係は不明。1間×3間の長方形を呈し、規模は梁間3.0m×桁行4.9mである。P4・P5、P6・P7、P9・P10、P11・P12で柱の建て替えが行われている。P1も平面形態から見て建て替えの可能性がある。P2に裏込石と見られる偏平礫がある。

出土遺物：P1から銭貨「開元通寶」(64) が1点出土した。

時　　期：銭貨の出土および柱穴の規模・形態から中世建物址と推定される。

4号建物址 (ST04)

検出遺構：調査区南東に位置する。西側を一部攪乱で破壊される。1間×3間の長方形を呈し、規模は梁間2.0m×桁行5.2mである。

出土遺物：P4から箱清水式の壷破片が出土した。

時　　期：P4出土土器は混入と解釈した。柱穴の規模・形態からST02、03、05とほぼ同時期と思われる。中世に属するものと推定される。

5号建物址 (ST05)

検出遺構：調査区南東に位置する。北東側を一部攪乱で破壊される。1間×3間の長方形を呈し、規模は梁間2.5m×桁行4.1mである。P5に相対する東側の柱穴は検出されなかった。P1・P2、P6・P7で柱の建て替えが行われている。

時　　期：遺物の出土はなかったが、柱穴の規模・形態からST02、03、04とほぼ同時期と思われ

る。中世に属するものと推定される。

6号建物址（ST06）

検出遺構：調査区中央東寄りに位置する。2（1）間×2（1）間の若干歪んだ長方形を呈し、規模は梁間2.4m×桁行3.8mである。南側と東側の中央の柱穴は検出不十分で確認できなかった可能性がある。

出土遺物：Ｐ１から箱清水式の鉢の小破片が出土した。

時　　期：不明。

7号建物址（ST07）

検出遺構：調査区中央に位置する。１間×１間の長方形を呈し、規模は3.5m×1.8mである。東側のＰ２・Ｐ３、Ｐ４・Ｐ５で柱の建て替えが行われている。

時　　期：出土土器がいずれも小破片のため時期を特定するに至らなかった。

8号建物址（ST08）

検出遺構：調査区南西部に位置する。１間×１間の正方形を呈し、規模は2.1m×2.2mである。

時　　期：不明。

9号建物址（ST09）

検出遺構：調査区中央北西寄りに位置する。１間×２間の長方形を呈し、規模は4.1m×4.8mである。

出土遺物：Ｐ４から箱清水式の甕破片が出土した。

時　　期：出土遺物および柱穴の規模・形態から弥生時代後期～古墳時代前期に属するものと推定される。

10号建物址（ST10）

検出遺構：調査区北西に位置する。１間×２間の正方形を呈し、規模は梁間2.1m×桁行2.2mである。ST09、ST11と主軸方向がほぼ一致する。

時　　期：不明。

11号建物址（ST11）

検出遺構：調査区北西に位置する。東西３間で 6.6mを測る。柱列両端の延長上にも柱穴と思われる遺構が存在するが、若干形態上の相違が見られるため除外した。なお、本址はST09の梁間構造を念頭に北側調査区域外へ柱列を想定し、掘立柱建物址と解釈した。

出土遺物：Ｐ３から箱清水式期の土器片が出土した。

時　　期：出土土器および主軸方向がST09と一致することから弥生時代後期～古墳時代前期に属するものと推定される。

（３）溝址

１号溝址（SD01）

検出遺構：調査区南部に位置する。SB02を切る。若干Ｓ字状に蛇行しながら東西方向に延びる。西側および中央部は攪乱で破壊されている。東端は削平により失われている。覆土は小礫を含む黒褐色土(10YR2/2）一層である。溝断面は東側は弓状であるが、西側へ向かうにつれて逆台形からＶ字形に変化する。西端でSD02と合流する。

出土遺物(47～50、62、63)：箱清水式期～平安前期各期の土器片が出土している。このうち（47）は北陸系の有段口縁甕、(49）は東海系のＳ字状口縁台付甕の破片である。(50）は高坏で棒状脚を有する。また長胴甕の破片も見られた(48、62)。このほか小破片のため図示しなかったが古墳初頭の高坏・甕、後期の長胴甕、奈良～平安の坏が出土している。

時　　期：西側でSB02を切ることから古墳初頭以降に構築されたものと解釈した。

２号溝址（SD02）

検出遺構：SB03東側に位置する。全体に削平が著しく北側は失われている。南側でSD01に合流する。なお、当初SD01・02合流部分を別遺構と考えたが、掘り下げの結果、溝址の一部分と判明した。

出土遺物：合流部分から箱清水式の高坏(51）が出土した。

時　　期：１号溝址と切り合いが見られないことから同時期と推定される。

３号溝址（SD03）

検出遺構：調査区中央北東寄りにある。覆土は小礫を含む黒褐色土(10YR3/1）である。

出土遺物：土師器片が出土している。

時　　期：不明。

４号溝址（SD04）・５号溝址（SD05）

検出遺構：調査区南西部に位置する。SD05の中間でSD04が合流する。またSD05は南端でSD06に合流する。いずれも切り合いはない。なお、SD05、06合流点では相互の溝底に段差が生じておりSD05の溝底の方が25㎝高い。

時　　期：SD06と同じ弥生時代後期と推定される。

７号溝址（SD07）

検出遺構：調査区中央やや南東寄りに位置する。南側はSD01の手前で切れ、西側は攪乱の手前で削平により失われている。Ｌ字形の溝址西側は検出時にわずかに黒褐色土の堆積が見られた。以上のことから本址は住居址の周溝であった可能性も考えられる。

時　　期：不明。

（４）土坑

51号土坑（SK51）

検出遺構：径102㎝×92㎝、深さ32㎝の不整円形。覆土は黒褐色土(10YR3/1）一層で褐色土

(10YR4/6) および指頭大～拳大の礫を含む。

出土遺物：箱清水式の壷・甕破片、検出面付近から石鏃(65) が出土した。

時　　期：弥生時代後期と推定される。

70号土坑 (SK70)

検出遺構：径81㎝×66㎝の不整円形。覆土は黒褐色土(10YR3/1) 一層で小礫・炭化物を含む。

出土遺物：箱清水式の壷・甕破片が出土した。

時　　期：弥生時代後期と推定される。

170号土坑 (SK170)

検出遺構：径41㎝×44㎝、深さ32㎝の不整円形。

出土遺物：底部から箱清水式期の鉢(52) が出土した。この鉢は口縁部全周を意図的に打ち欠いており、これを覆うように上部に偏平礫が置かれていた。

219号土坑 (SK219)

検出遺構：径60㎝×58㎝の円形ですり鉢状の断面を呈する。覆土は黒褐色土(10YR3/1) 一層である。また、拳大の礫が土坑内に投棄されたかの様な状態で出土した。

時　　期：須恵器坏(53) が出土したことから奈良時代に属するものと推定される。

出土遺物一覧表1

土　器

NO.	出土遺構	A器種	B制作技法	Cその他特記事項	a色調	b焼成	c胎土	残存率
1	SB01	A壷	B外面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒を含む	胴下部1/3
2	SB01	A高坏	B内外面ヘラ磨き		aにぶい褐	b良	c砂粒を含む	坏部1/6
3	SB02	A壷	B内面ヘラ調整		a橙	b良	c砂粒を含む	1/5
4	SB04	A甕	B内面ヘラ調整		a橙	b良	c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	頸部1/4
5	SB04	A甕	B口縁部ナデ・内面ヘラ磨き	C内面の一部に炭素の吸着が見られる	a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	完形
6	SB04	A甕	B内面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒・雲母を多く含む	1/2
7	SB04	A小型甕か?			aにぶい赤褐	bやや不良	c砂粒を多く含む	底部完形
8	SB04	A甕			a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	口縁1/4
9	SB04	A甕	B口縁部ナデ・内面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒を多く含む	頸部1/4
10	SB04	A甕	B口縁部ナデ・内面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒・雲母・黒色粒子を含む	頸部1/4
11	SB04	A甕	B内面ヘラ調整		a橙	b良	c粗粒の砂・茶色粒子を含む	2/3
12	SB04	A甕	B内面ヘラ調整		a橙	b良	c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	1/3
13	SB04	A高坏	C片口付		a橙	b良	c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	坏部1/3
14	SB04	A高坏	B内外面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	脚部
15	SB04	A高坏	B内外面ヘラ磨き	C口縁部に小突起を有する	a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	坏部3/5
16	SB04	A鉢	B内外面ヘラ磨き	C片口付	aにぶい橙	b良	c粗粒の砂・雲母を多く含む	1/3

出土遺物一覧表２

土　器

NO.	出土遺構	A器種	B制作技法	Cその他特記事項	a色調	b焼成	c胎土	残存率
17	SB04	A鉢	C片口付		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	1/4
18	SB04	A土製円板	C箱清水式土器片の転用品		aにぶい橙	b良	c砂粒を含む	完形
19	SB04	A壷	B外面ハケ調整後、ヘラ磨き・内面ヘラ調整		aにぶい橙	b良	c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	胴下部1/2
20	SB05	A壷	B内外面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	頸部2/5
21	SB05	A壷	B内外面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒・茶色粒子を含む	頸部3/4
22	SB05	A壷	B口縁部ナデ・内面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	口縁1/3
23	SB05	A壷	B外面ヘラ磨き		aにぶい橙	b良	c砂粒・雲母を含む	口縁完形
24	SB05	A壷	B外面ヘラ磨き・内面剥落	C炉胎土器	a橙	b良	c粗粒の砂を含む	底部完形
25	SB05	A甕			a橙	b良	c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	口縁4/5
26	SB05	A甕	B口縁部ナデ・内面ヘラ削り		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	口縁1/2
27	SB05	A甕	B内面ヘラ磨き		a明赤褐	b良	c砂粒・雲母を含む	口~頸部1/3
28	SB05	A甕	B内面ヘラ調整		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	口~頸部1/4
29	SB05	A甕	B内面ヘラ調整		a明赤褐	b良	c砂粒を多く含む	口縁~胴部1/3
30	SB05	A甕	B内面ヘラ調整		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	頸部1/4
31	SB05	A甕			a橙	b良	c砂粒を多く含む	破片
32	SB05	A甕			a橙	b良	c粗粒の砂を含む	底部完形
33	SB05	A甕			a明赤褐	bやや不良	c砂粒を多く含む	頸~胴部1/3
34	SB05	A甕	B口縁部ナデ		a橙	b良	c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	1/4
35	SB05	A甕	B内面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	口縁1/4
36	SB05	A甕	B内面ナデ		aにぶい褐	b良	c砂粒・雲母を含む	2/3
37	SB05	A小型器台			a浅黄橙	b良	c細粒の砂・灰色粒子を含む	坏部1/8
38	SB05	A高坏	C雫形透し穴3、円形透し穴1を有する		a明赤褐	bやや不良	c砂粒・雲母を含む	脚部完形
39	SB05	A高坏	B外面ヘラ磨き・内面ハケ目		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	脚部完形
40	SB05	A高坏	B外面ヘラ磨き・内面ハケ目		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	脚部1/3
41	SB05	A鉢	B内外面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒を含む	3/5
42	SB05	A鉢	B内面ヘラ磨き		a黄橙	b良	c砂粒・雲母を含む	底部完形
43	SB05	A鉢	B内面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	2/5
44	SB05	A甕か？	C高台状の高まりを有する		a褐灰	b良	c砂粒・雲母を含む	底部1/4
45	SB05	A壷か？	B内外面ヘラ磨き・内面黒色処理		a橙	b良	c砂粒・茶色粒子を含む	底部完形
46	SB05	A土製円板	C箱清水式土器片の転用		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	完形
47	SD01	A甕	B内外面ナデ	C有段口縁・北陸系土器	aにぶい橙	b良	c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	破片
48	SD01	A長胴甕	B外面・底面ヘラ削り・内面ヘラ調整		aにぶい褐	b良	c砂粒・雲母を含む	底部1/4
49	SD01	A S字甕	B口縁ナデ・外面ハケ調整 C S字状口縁・東海系土器		a橙	b良	c砂粒を多く含む	口縁1/5
50	SD01	A高坏	B表面ヘラ磨き	C棒状脚	a橙	b良	c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	脚部
51	SD02	A高坏	B内外面ヘラ磨き		a橙	b良	c砂粒・雲母を含む	坏部完形

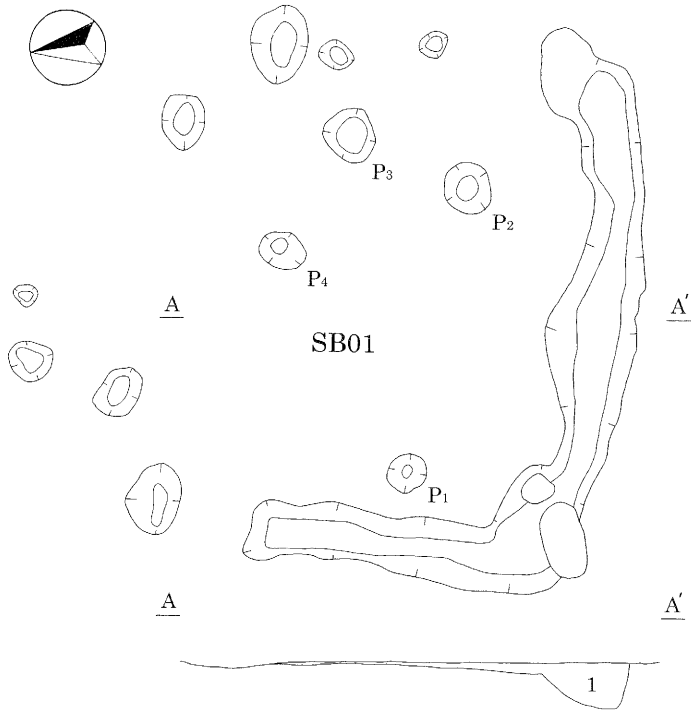
出土遺物一覧表 3

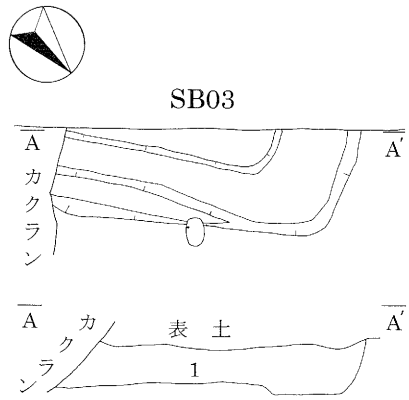
土　器

NO.	出土遺構	A器種　B制作技法　Cその他特記事項	a色調　b焼成　c胎土	残存率
52	SK170	A鉢　B内面ヘラ磨き C口縁部全周を意図的に打ち欠いている	aにぶい橙　b良　c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	完形
53	SK219	A坏　Bロクロ成形・貼付高台・底部ヘラ切り	a暗青灰色　b良　c砂粒を含む	底部1/3
54	遺構外	A甕　B外面ナデ　C有段口縁・北陸系土器	a橙　b良　c砂粒・雲母・茶色粒子を含む	破片
55	SB02	A甕　B外面ハケ目	aにぶい褐　b良　c砂粒・雲母・白色粒子を含む	破片
56	SB03	A甕　B外面ハケ目	a橙　b良　c砂粒・雲母を含む	破片
57	SB03	A甕	a橙　b良　c砂粒・黒雲母を多く含む	破片
58	SB04	A S字甕　B外面ハケ目　C S字状口縁・東海系土器	a橙　b良　c砂粒を含む	破片
59	SB04	A壷　B内面ヘラ調整	aにぶい橙　b良　c砂粒・雲母を含む	破片
60	SB05	A甕　B内面ハケ調整・ヘラ磨き	a灰黄　b良　c細粒の砂を含む	破片
61	SB05	A甕	a橙　b良　c細粒の砂を含む	破片
62	SD01	A長胴甕　B口縁ナデ　C胎土に粗粒の砂を含む	aにぶい褐　b良　c小礫・砂粒・雲母を含む	破片
63	SD01	A甕(須恵)　B外面叩き目	a灰色　b良　c砂粒・茶色粒子を含む	破片

石　器・銭

NO.	出土遺構	器種	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	備　考
64	ST03	銭	直径23mm			2.9	青銅	唐「開元通寶」(初鋳621年)
65	SK51	石鏃	18	13	3	0.5	黒耀石	
66	SB04	磨石	67	51	45	221	安山岩	
67	SB04	棒状礫	114	50	36	302	安山岩	
68	SB04	棒状礫	158	65	45	676	安山岩	上端に剥離痕あり
69	SB04	敲石	135	52	43	468	頁岩	上端敲打痕・下端敲打による剥離
70	SB04	砥石	168	86	37	822	安山岩	表裏の平坦面に磨痕が見られる 下端に敲打に伴う剥離痕あり
71	SB05	砥石	214	196	48	3360	安山岩	両面に磨痕あり
72	SB05	砥石	177	119	29	883	安山岩	片面に磨痕あり


P3
P2
P4
A
A′
SB01
P1
A
A′
1
1 ：黒褐色土層


SB03
A
A′
カクラン
A
カクラン
表 土
A′
1
1 ：黒褐色土層

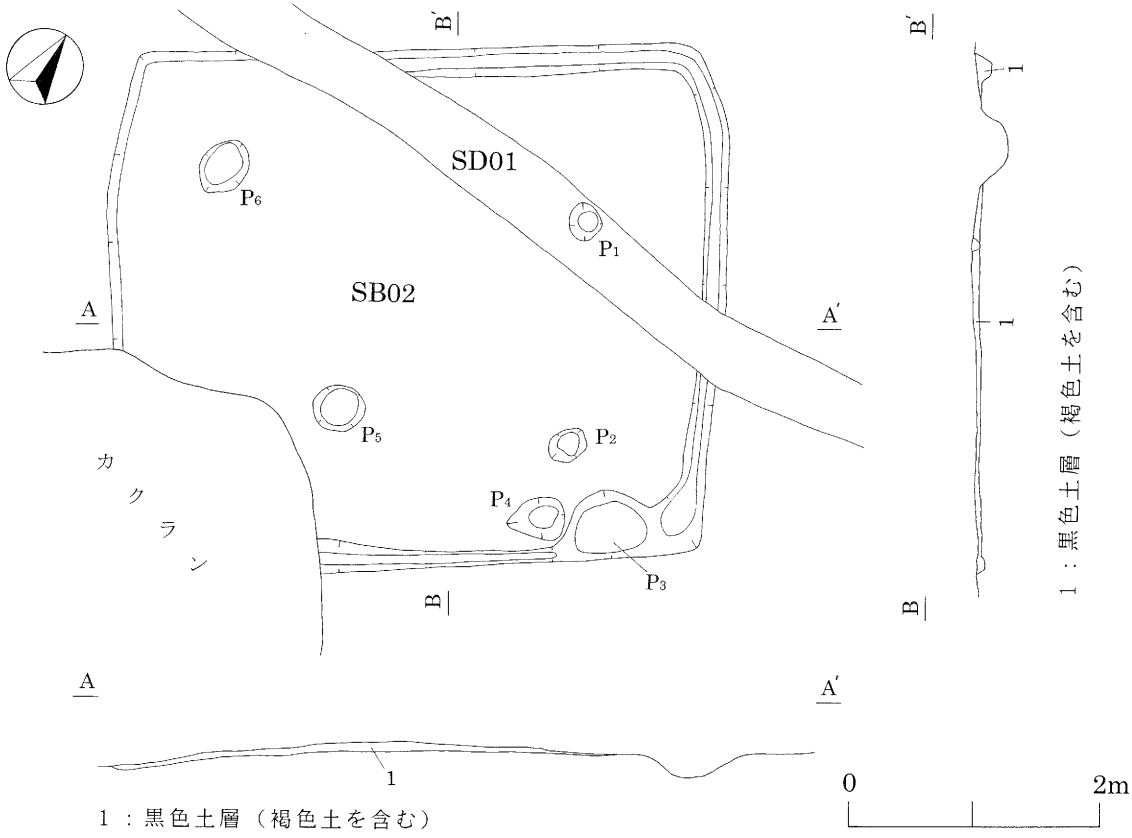
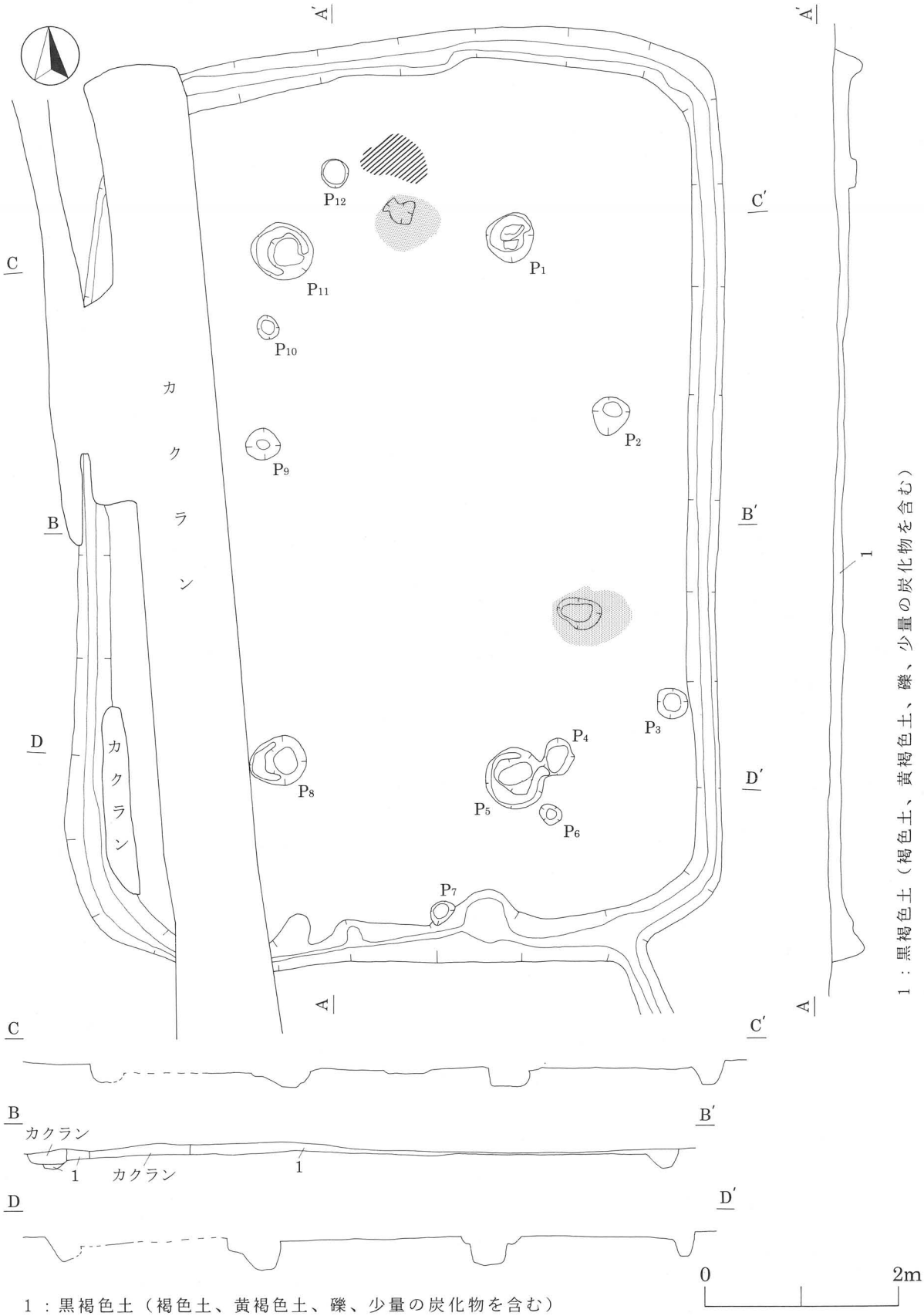

B′
SD01
P6
P1
SB02
A
A′
P5
P2
カクラン
P4
P3
B
A
A′
1
1 ：黒色土層（褐色土を含む）
B′
1
1
B
1 ：黒色土層（褐色土を含む）
0
2m

図４　１・２・３号住居址



1：黒褐色土（褐色土、黄褐色土、礫、少量の炭化物を含む）

図5　4号住居址

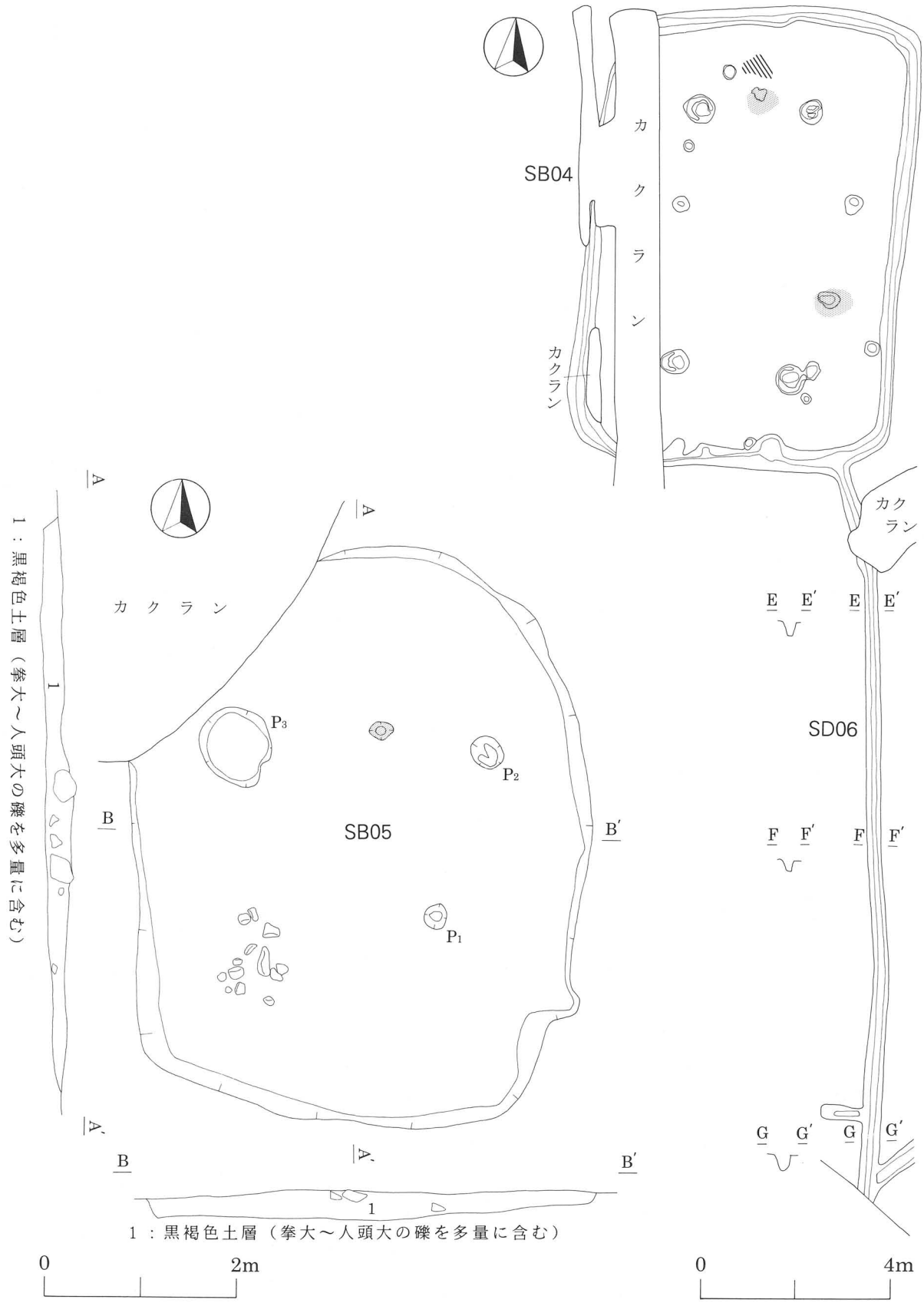


図６　４号住居址溝状施設付属状況・５号住居址

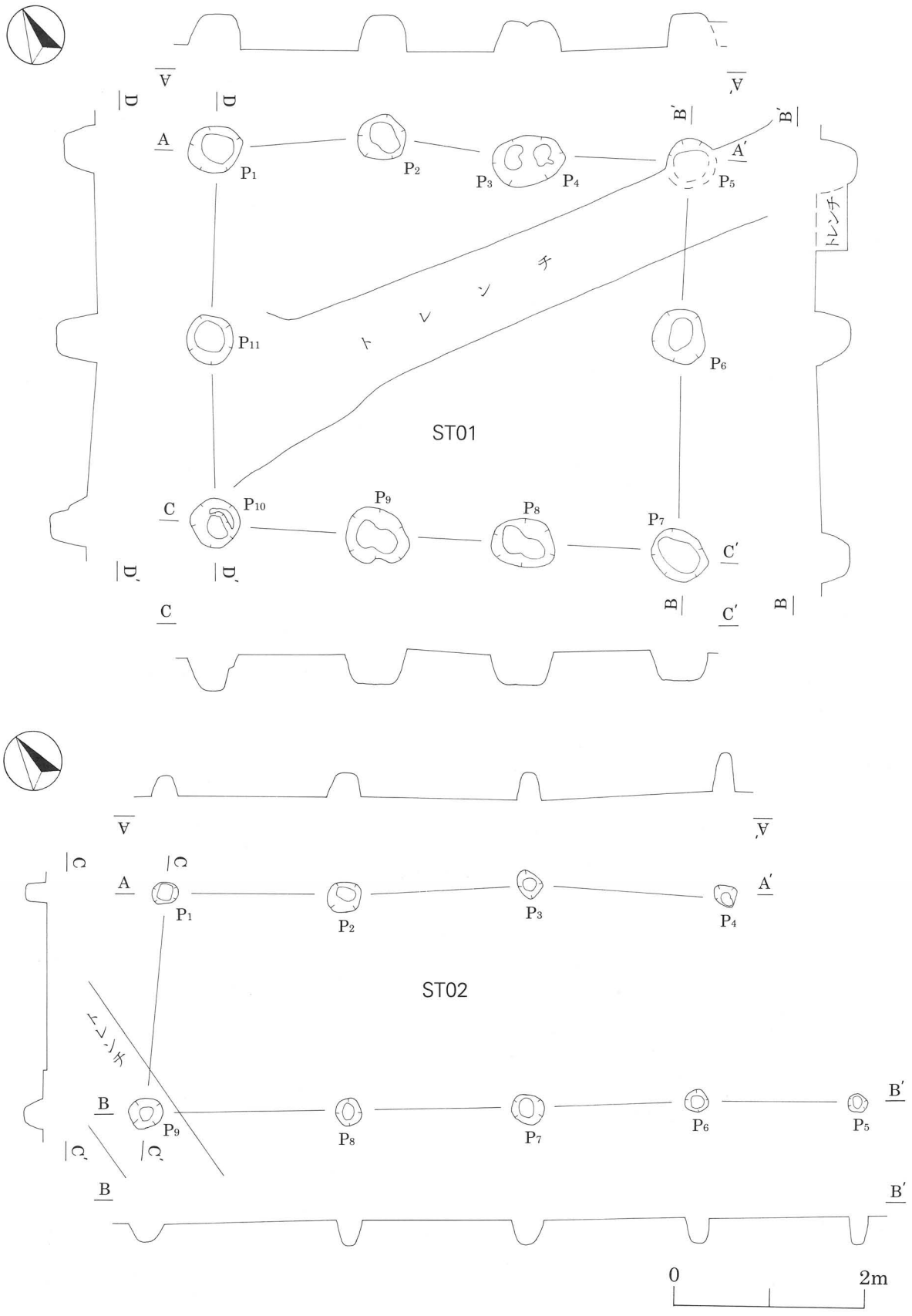


図7　1・2号掘立柱建物址

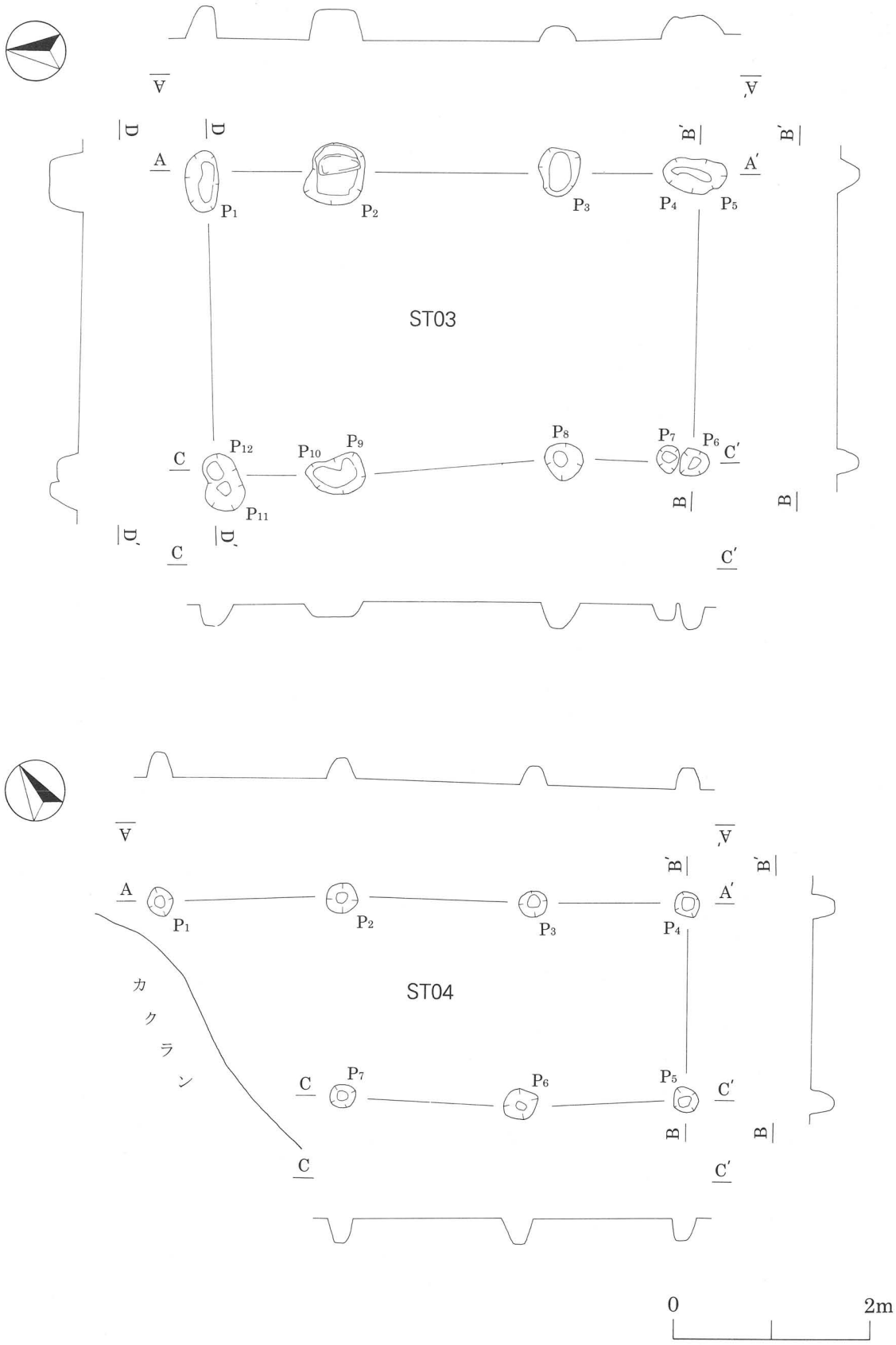


図８　３・４号掘立柱建物址

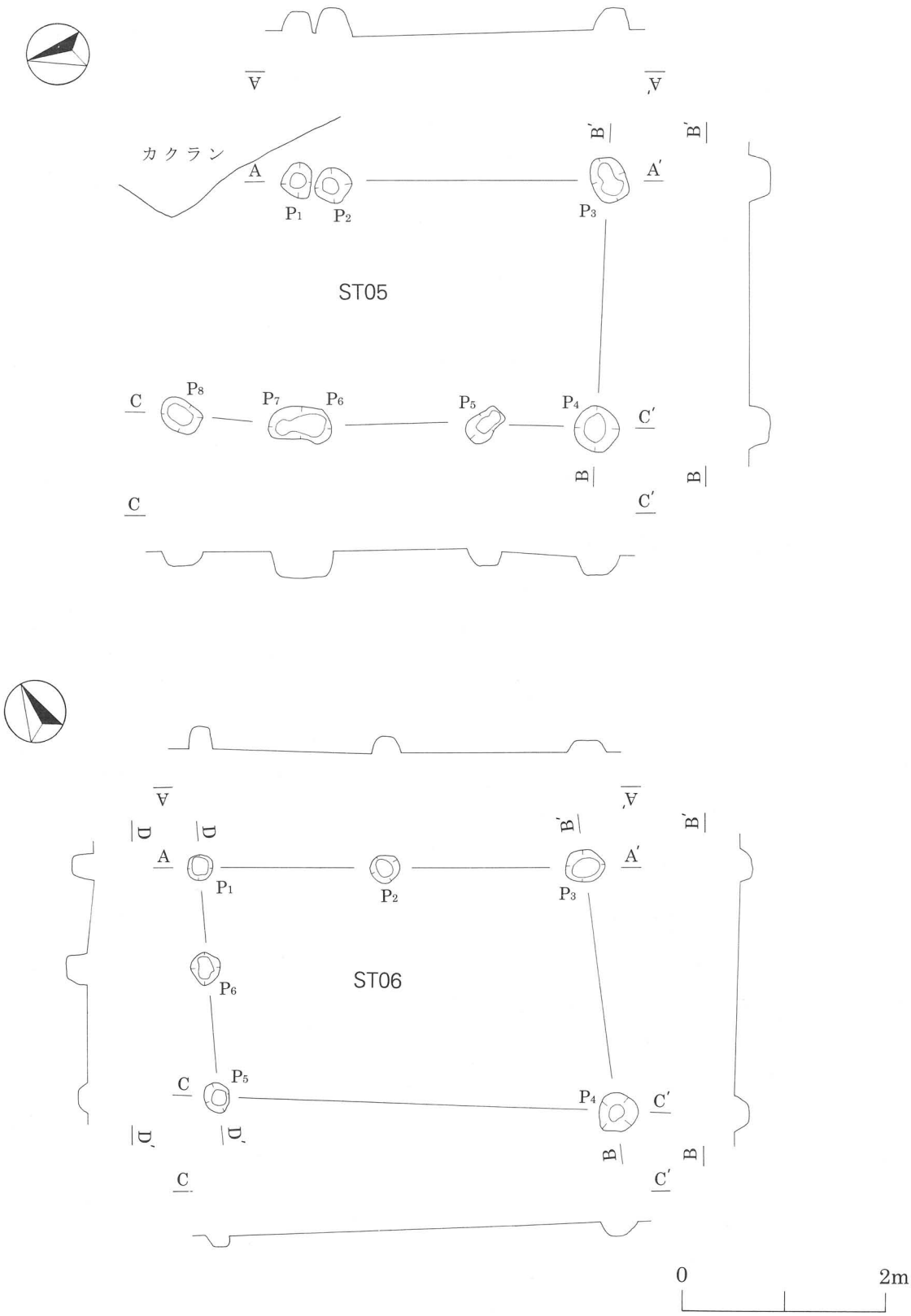


図９　５・６号掘立柱建物址

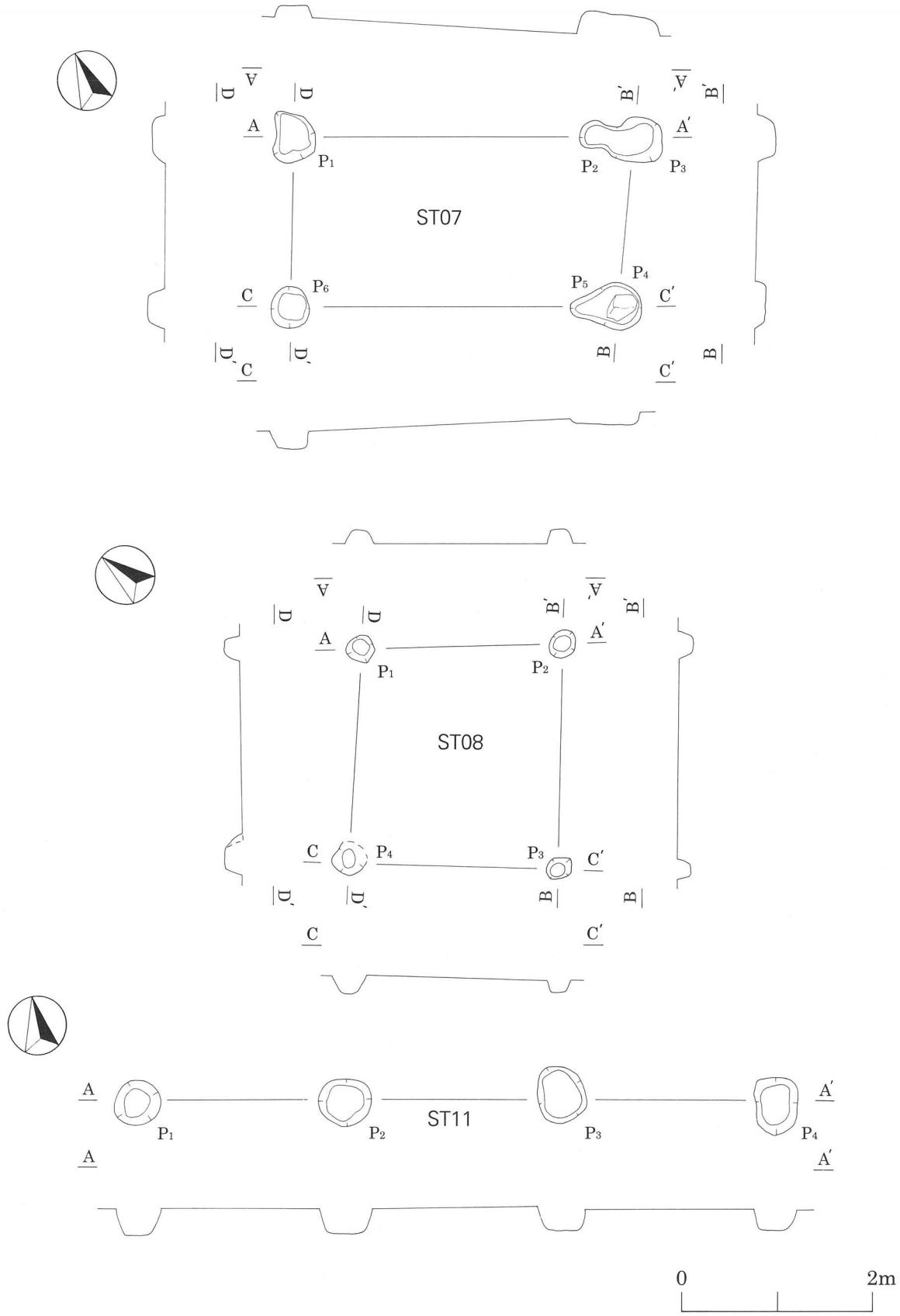


図10　7・8・11号掘立柱建物址

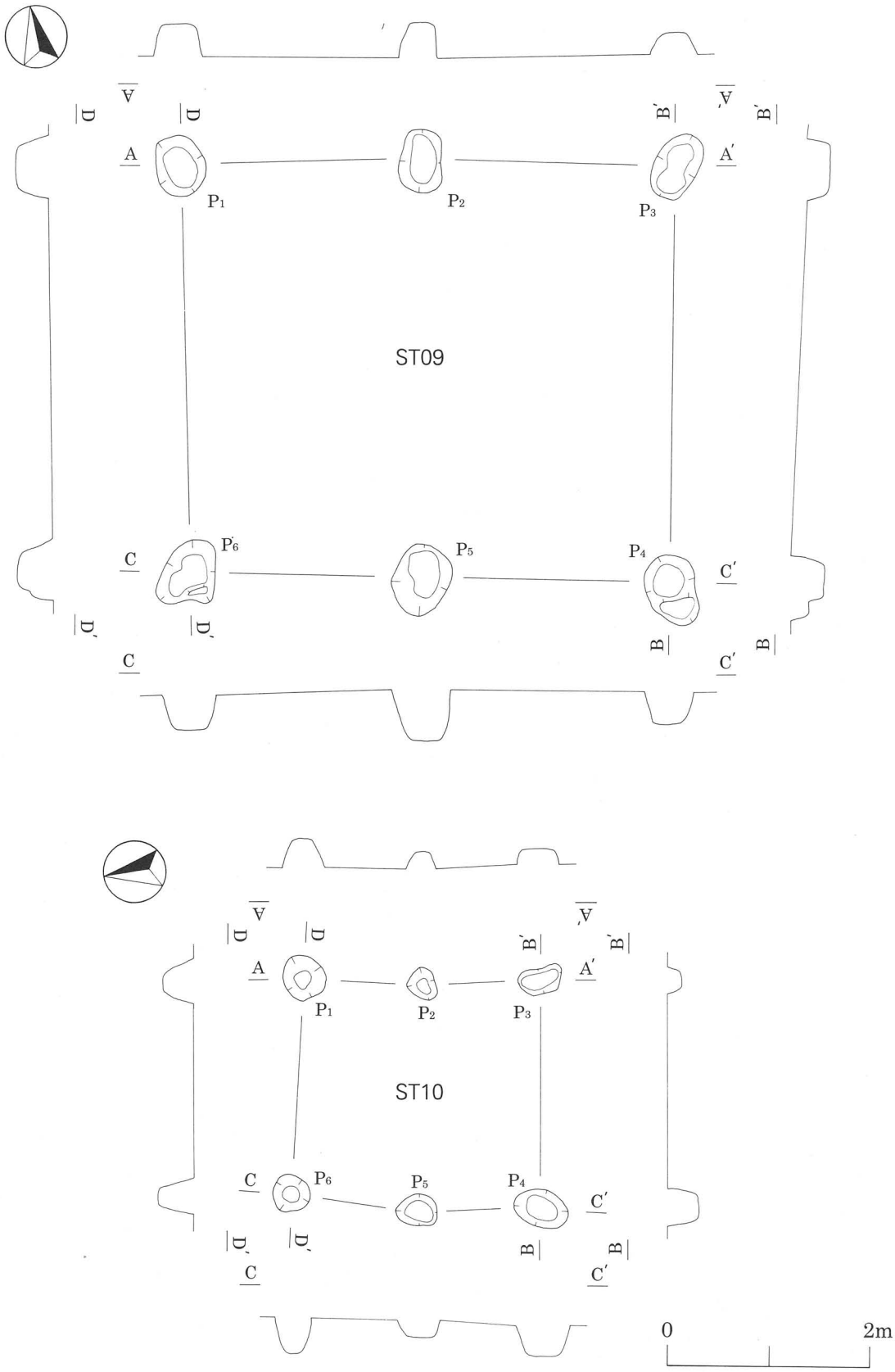


図11　9・10号掘立柱建物址

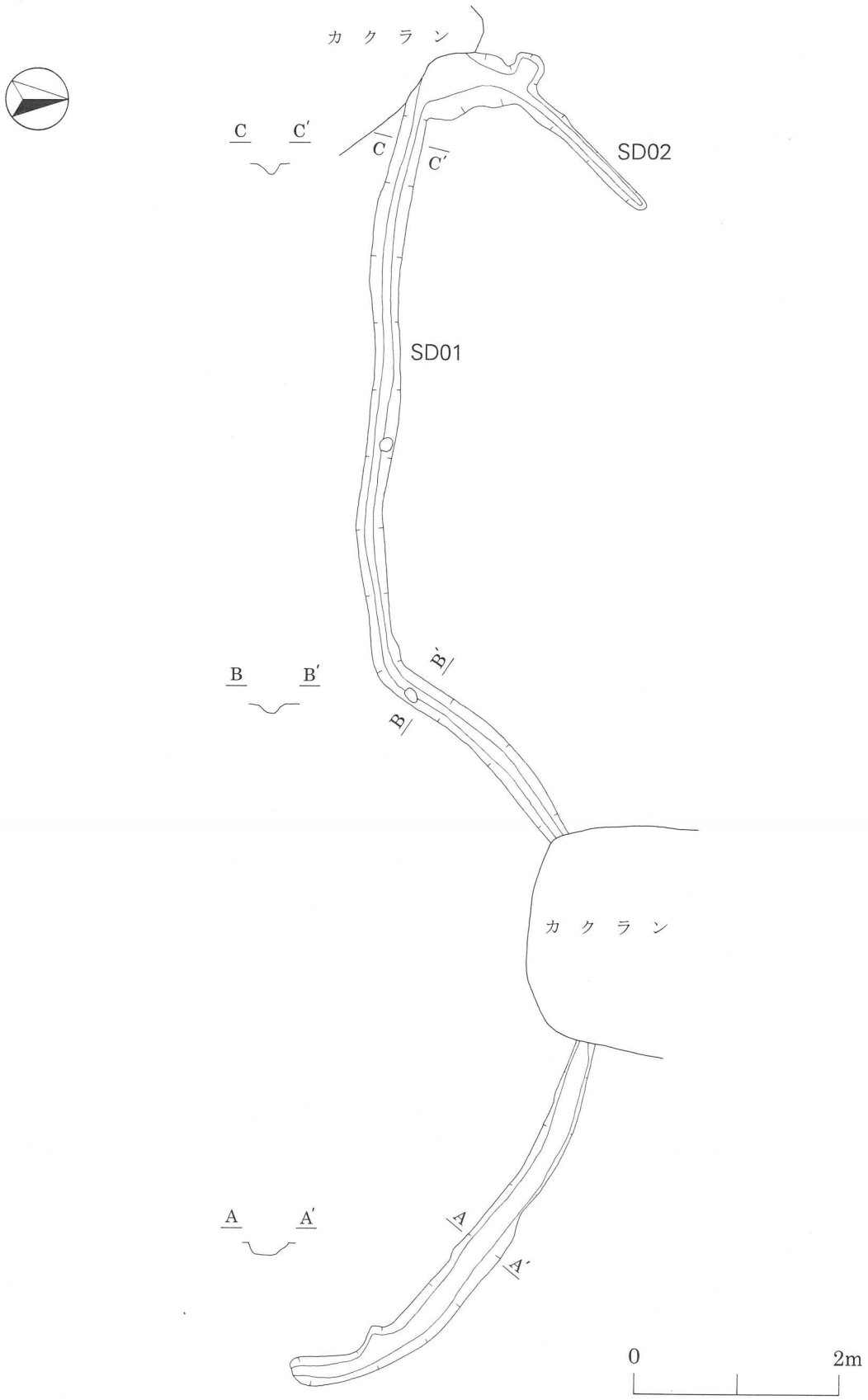


図12　1・2号溝址

図13　4・5・6号溝址

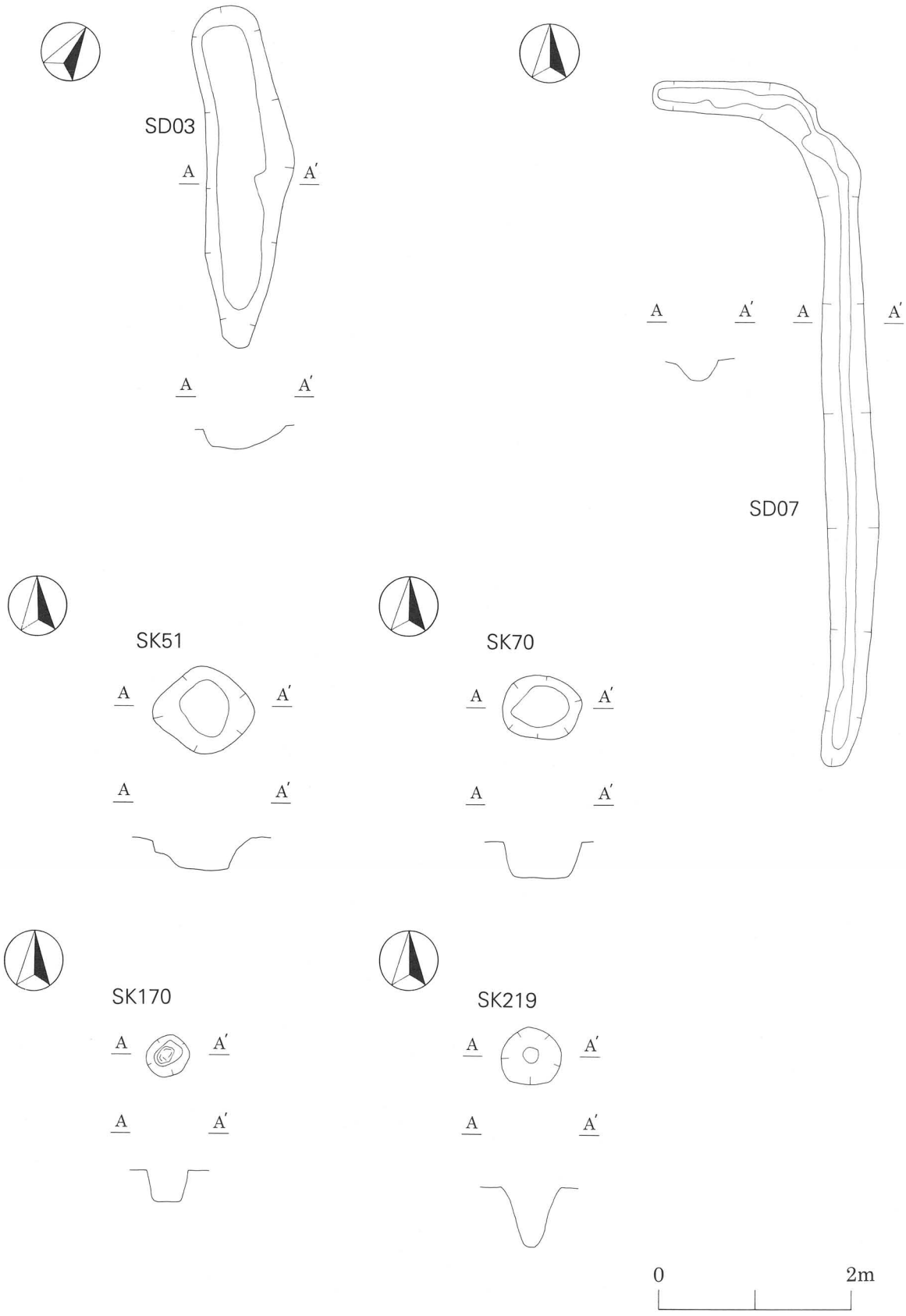
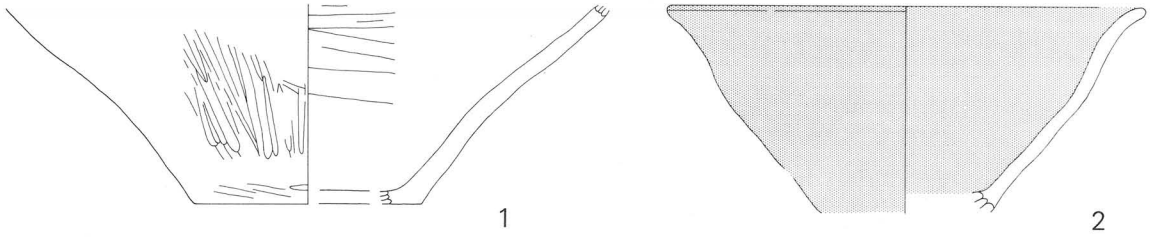
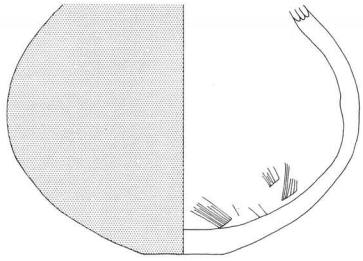


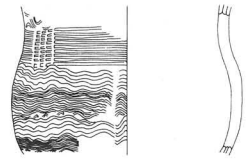
図 14　3・7 号溝址、51・70・170・219 号土坑

1号住居址（SB01）

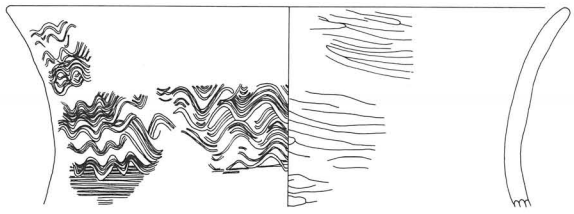


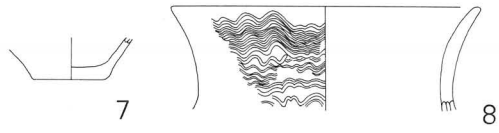
2号住居址（SB02）

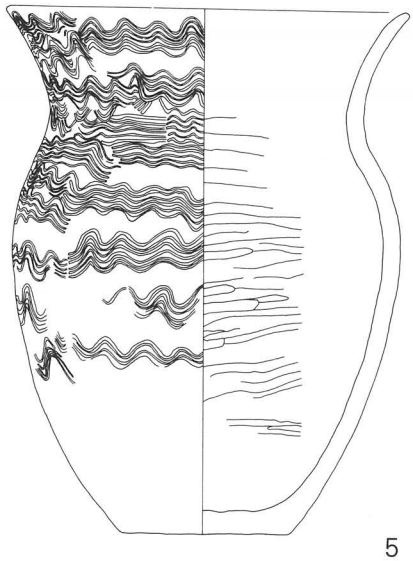


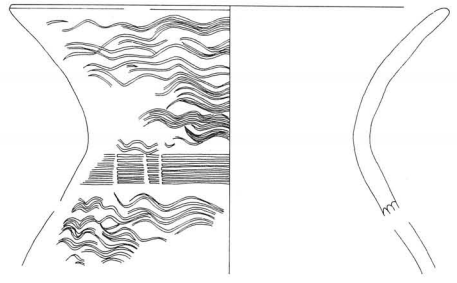


4号住居址（SB04）









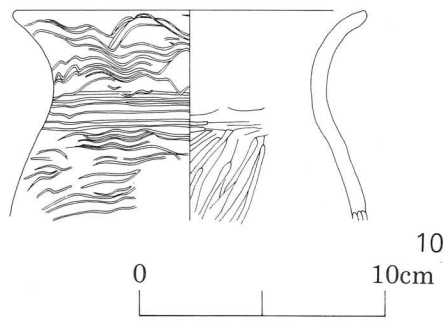
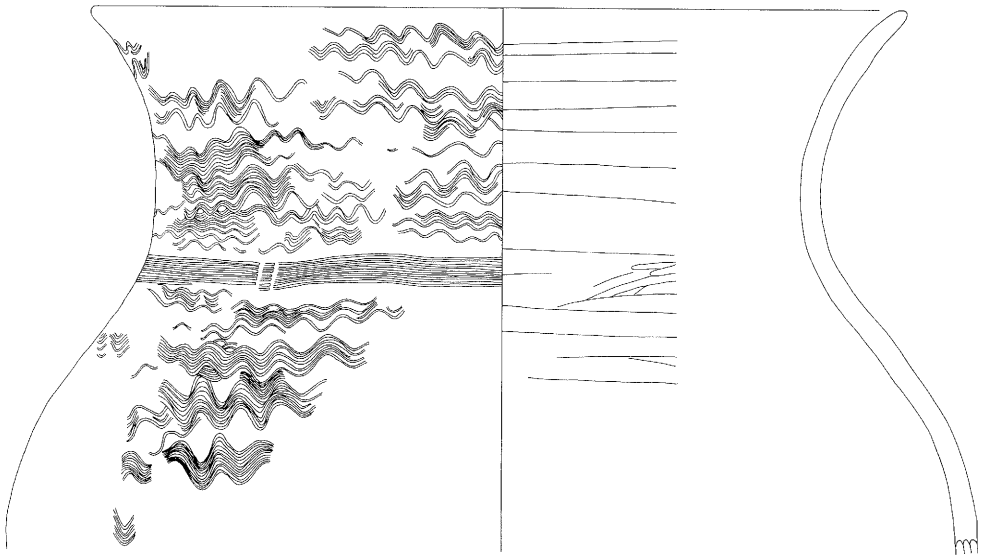
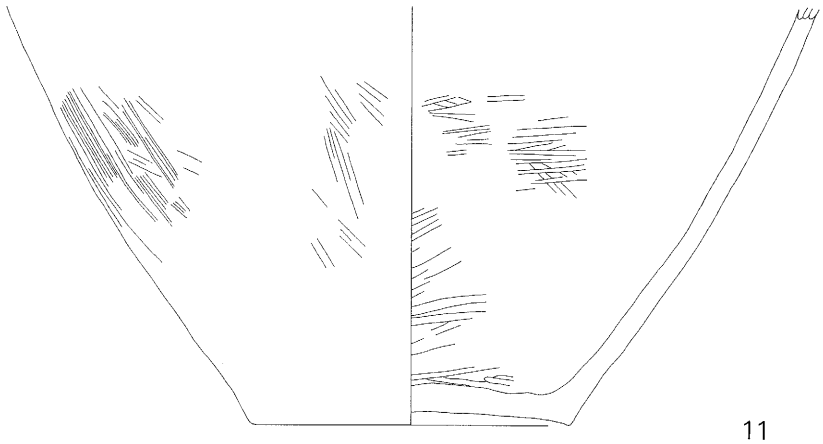


図15　出土遺物（土器）

4号住居址（SB04）





11

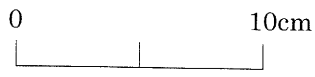


図16　出土遺物（土器）

4号住居址（SB04）

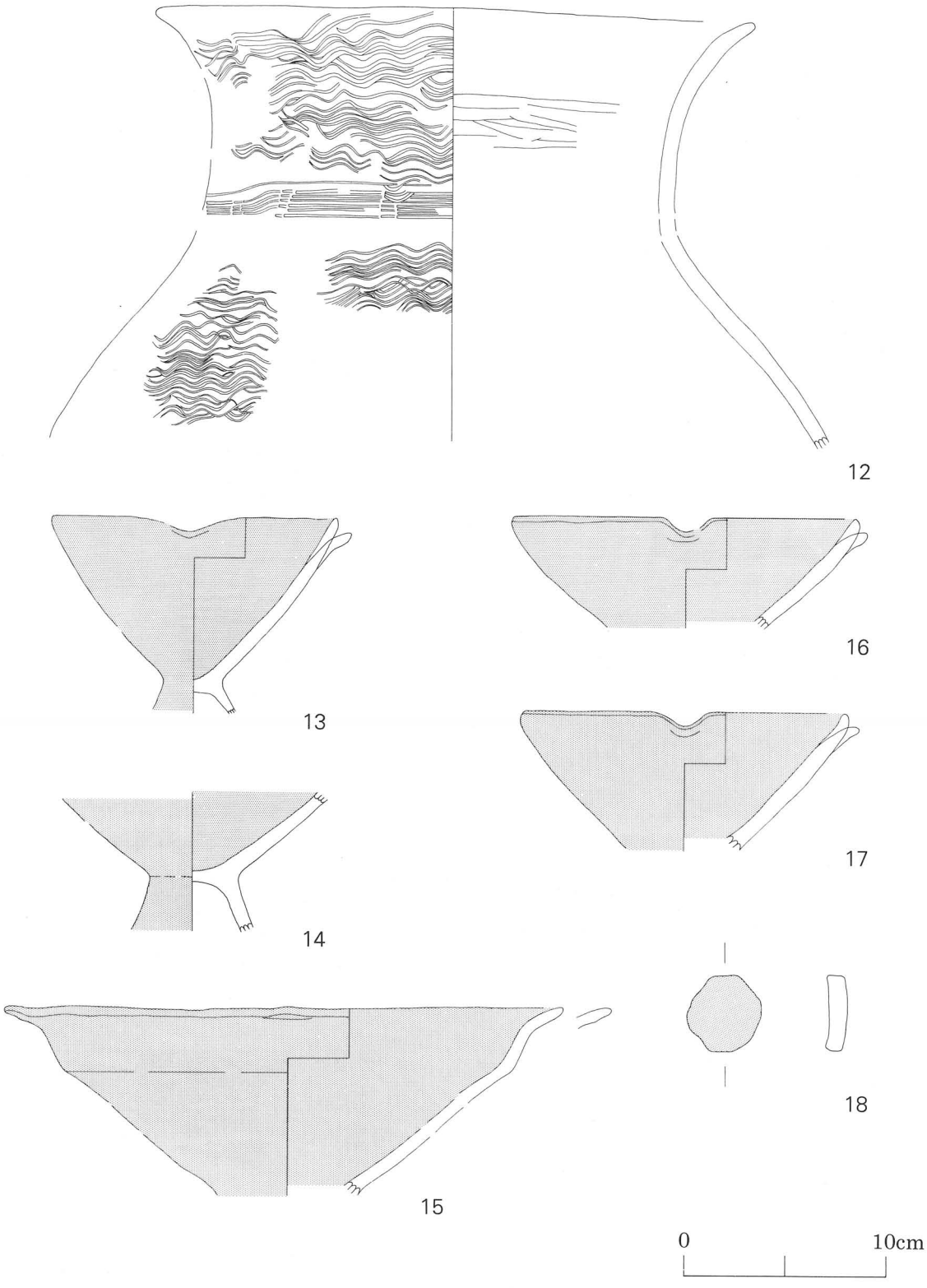
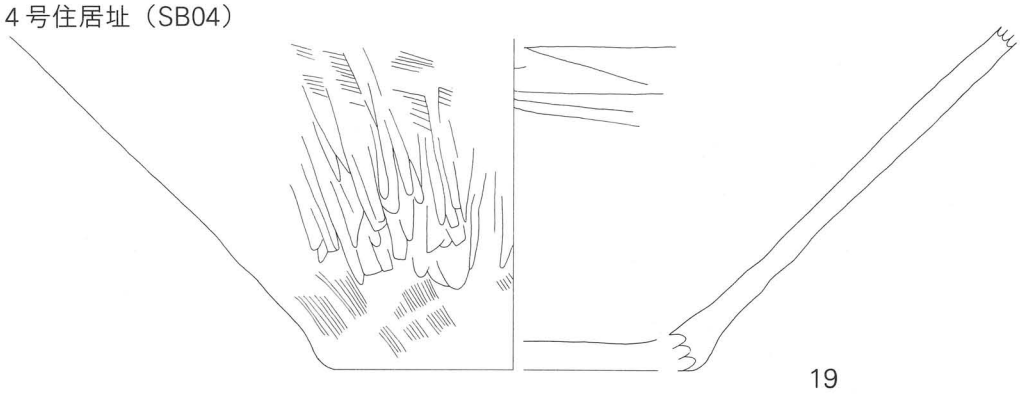


図17　出土遺物（土器）

4号住居址（SB04）



5号住居址（SB05）

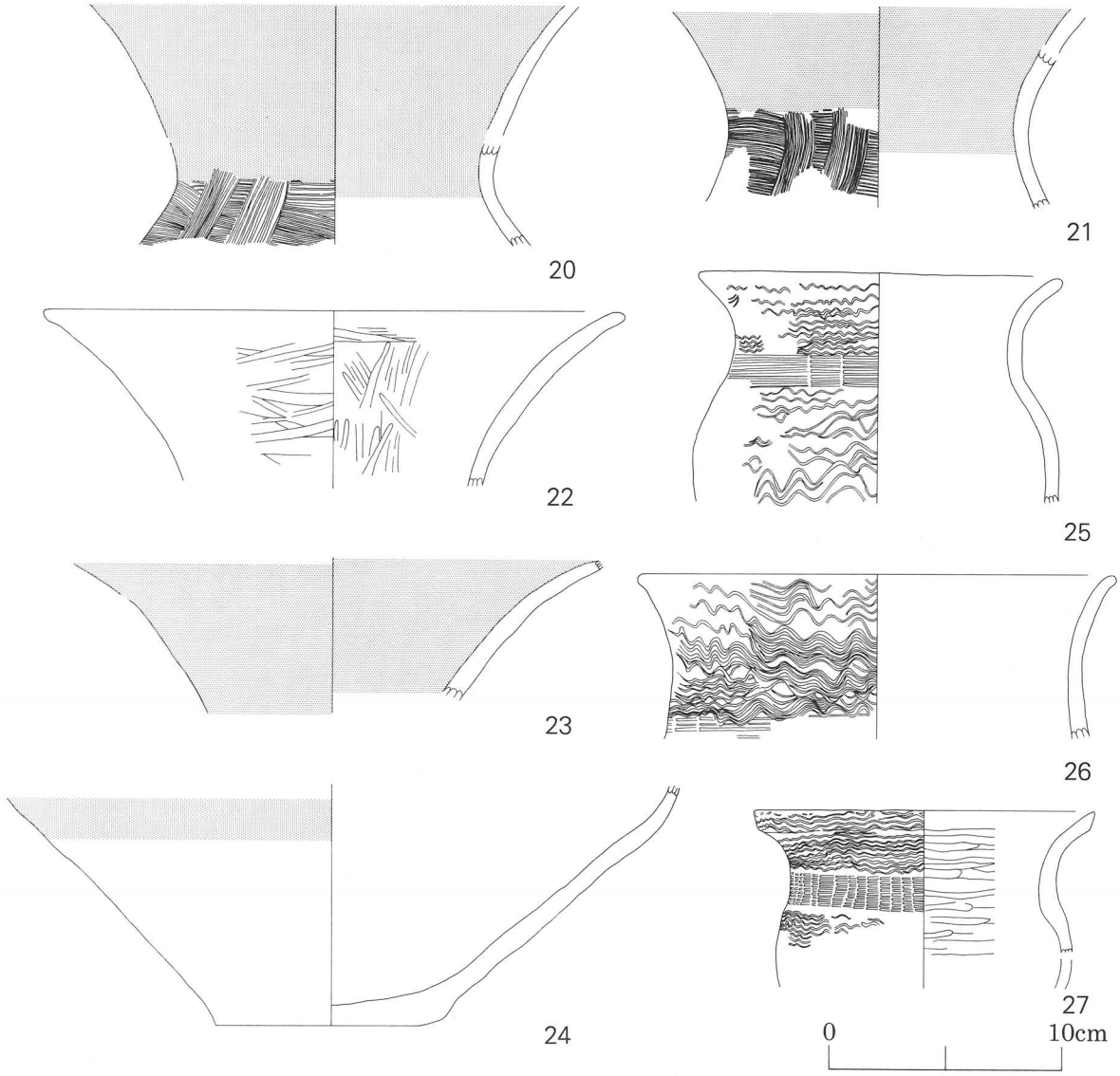


図18　出土遺物（土器）

5号住居址（SB05）

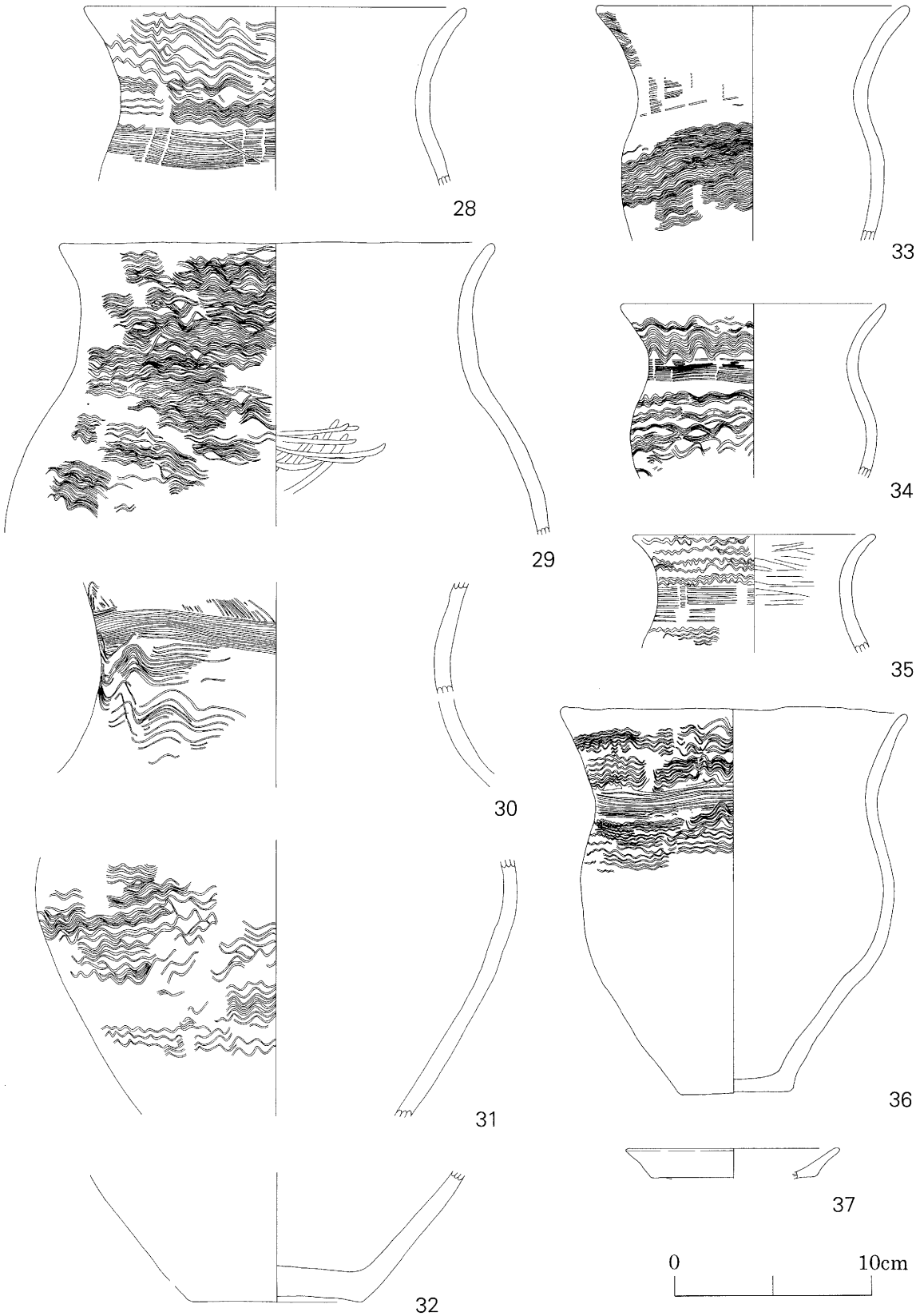
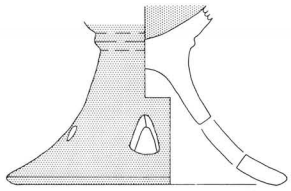
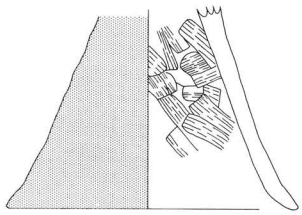
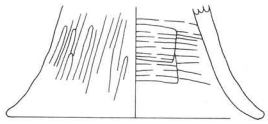


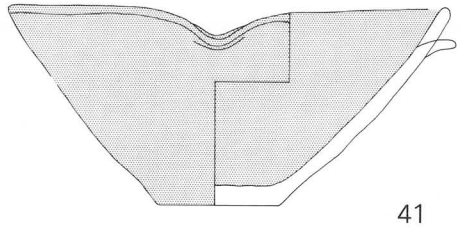
図19　出土遺物（土器）

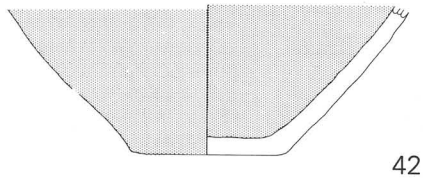
5号住居址（SB05）

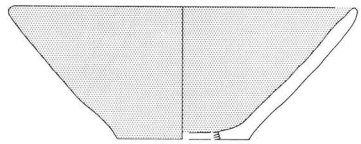

38

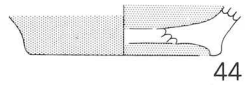

39

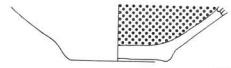

40

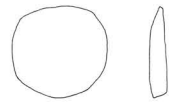

41


42


43

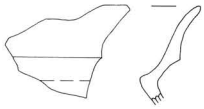

44

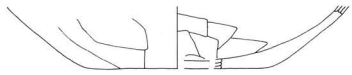

45

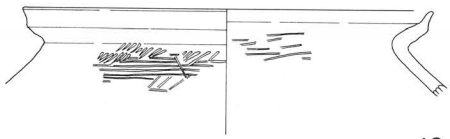

46

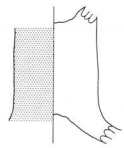
SK170

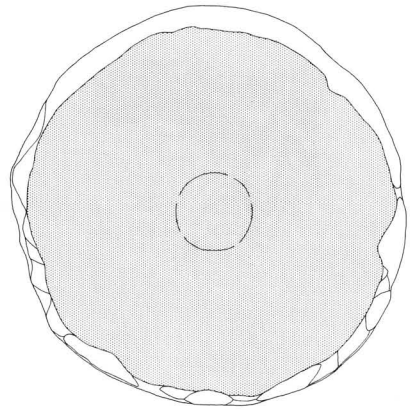
1号溝址（SD01）


47

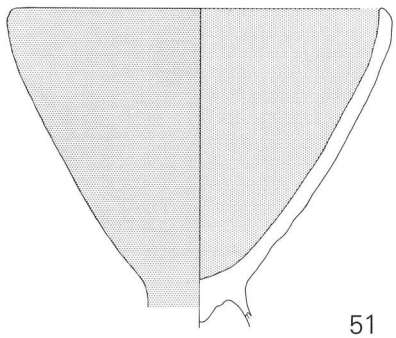

48

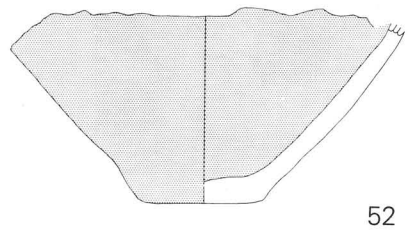

49


50

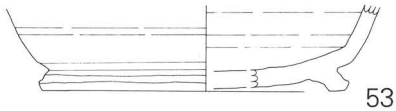


2号溝址（SD02）


51


52

SK219


53

54

遺構外

0　10cm

図20　出土遺物（土器）

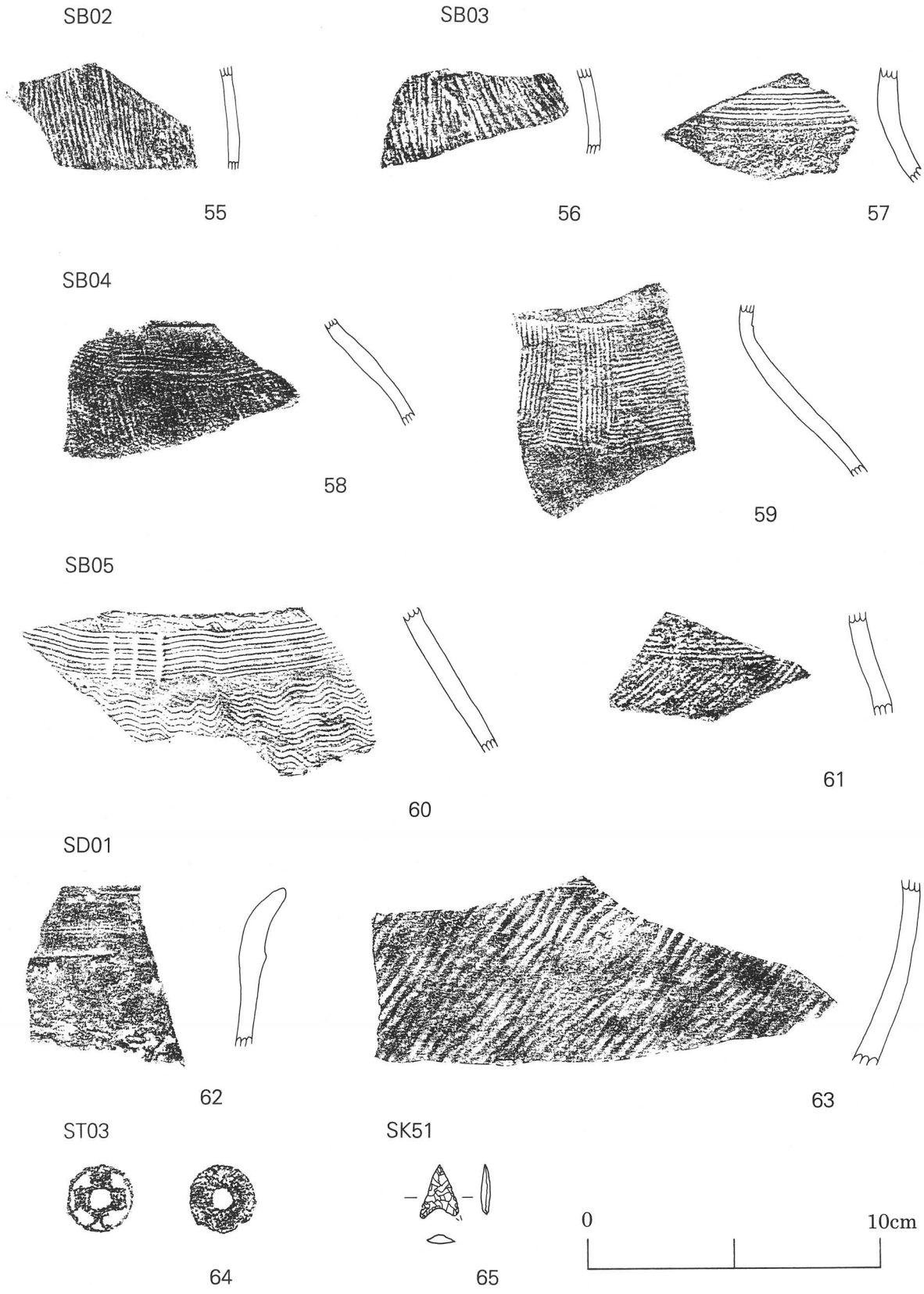


図21 出土遺物（土器・銭・石器）

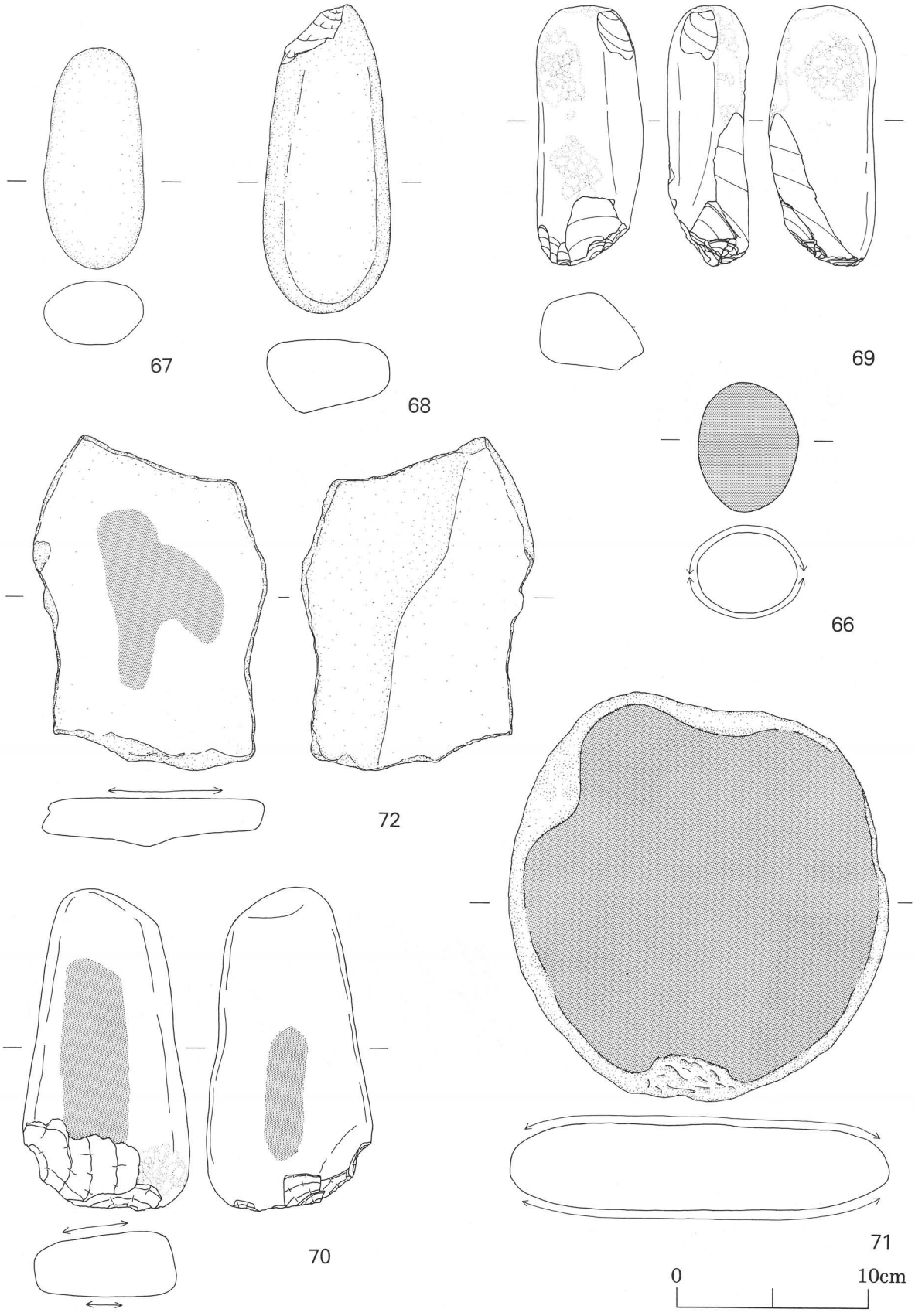
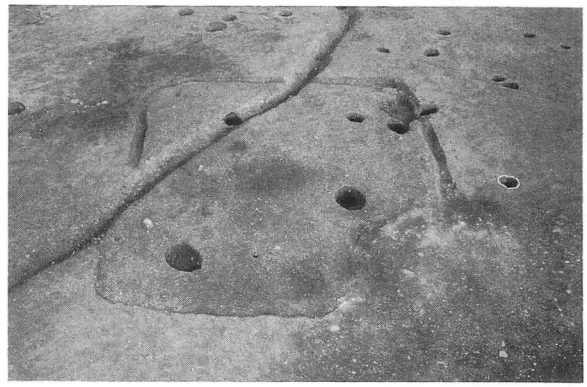


図22　出土遺物（石器）

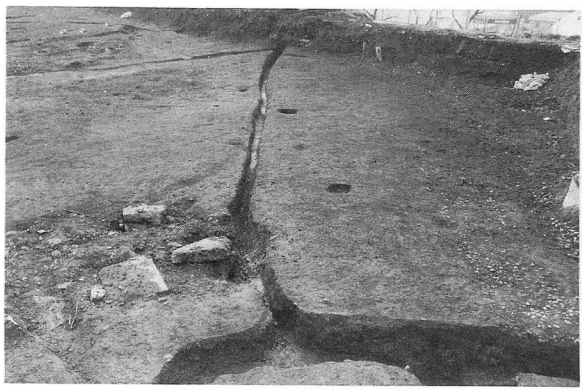
1 号住居址（SB01）



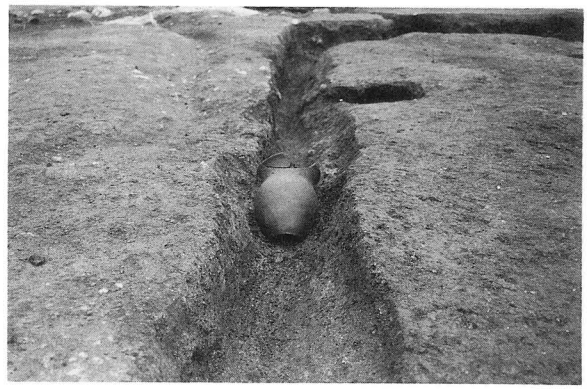
2 号住居址（SB02）

3 号住居址（SB03）

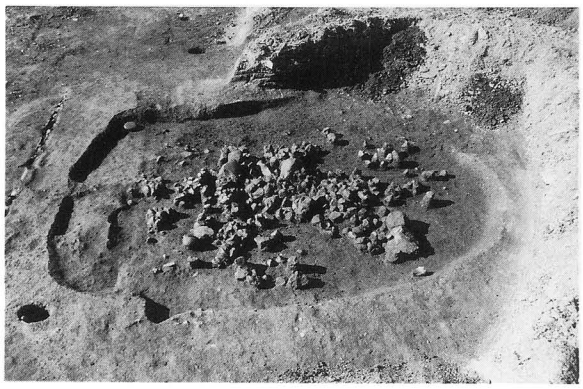
4 号住居址（SB04）（後方は千曲川段丘崖）



6 号溝址（SD06）（SB04付属施設）



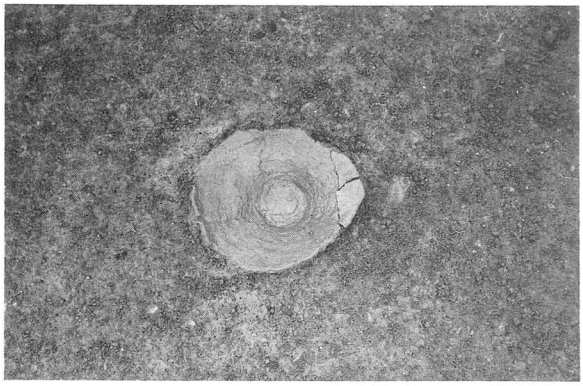
甕（No. 5 ）出土状況（SB04東側周溝内）



5 号住居址（SB05）礫出土状況

5 号住居址（SB05）

図版 2



炉胎土器（壺・№24）出土状況（SB05）

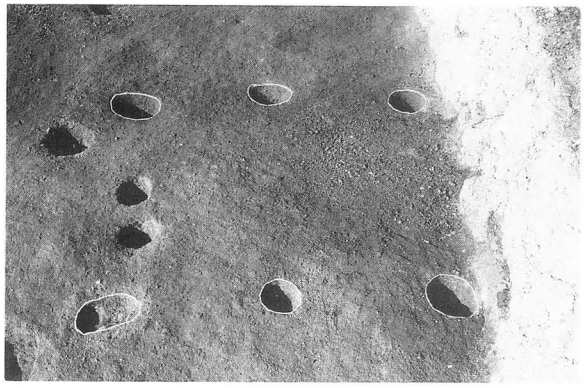
1 号建物址（ST01）

2 号建物址（ST02）

3 号建物址（ST03）

4 号建物址（ST04）

9 号建物址（ST09）



10号建物址（ST10）

発掘参加者

1 号溝址（SD01）東側部分

1 号溝址（SD01）西側部分

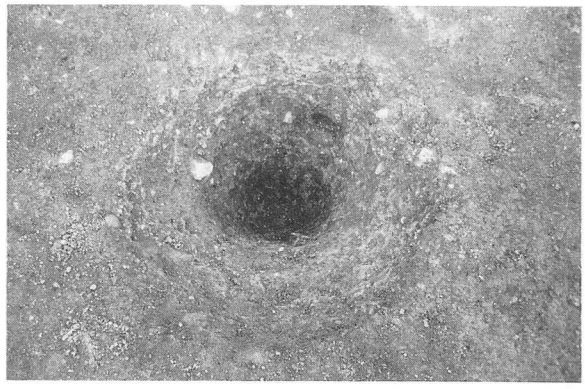
4 ・ 5 ・ 6 号溝址（SD04・05・06）

7 号溝址（SD07）

170号土坑（SK170）礫・鉢出土状況

170号土坑（SK170）鉢出土状況

219号土坑（SK219）礫出土状況

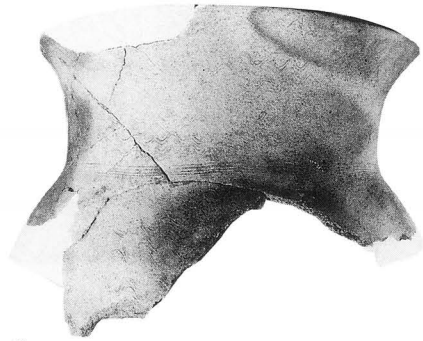


219号土坑（SK219）

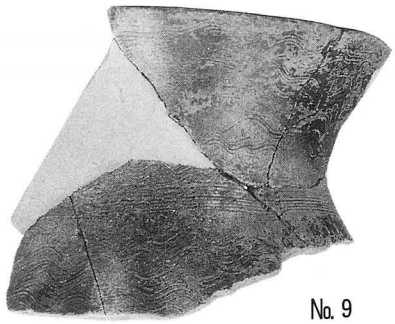
図版 4

No. 5

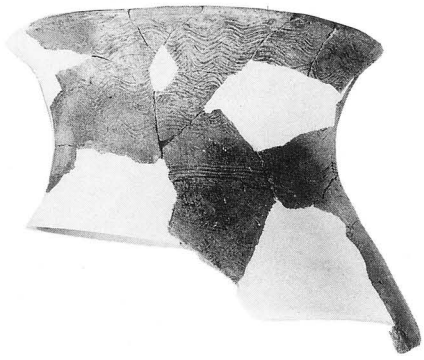
No. 6



No.11



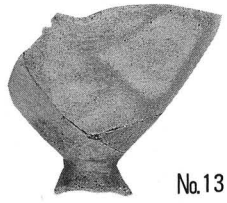
No. 9



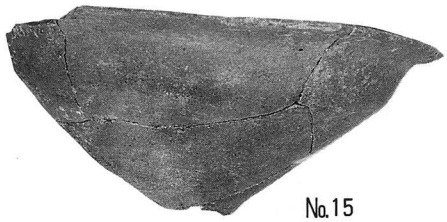
No.12

No.10

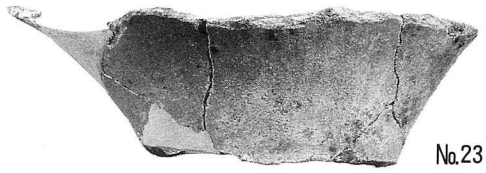
No.18



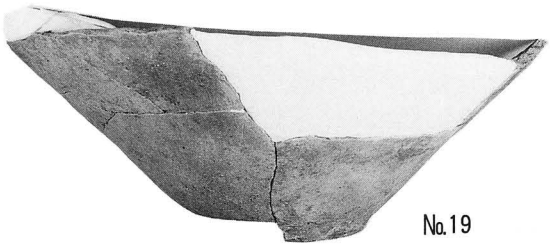
No.13



No.15



No.23

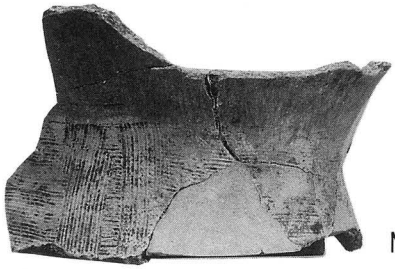


No.19

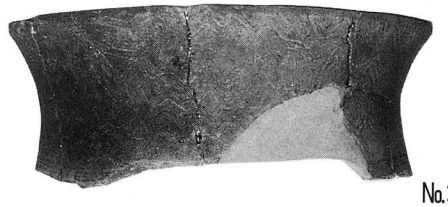
No.24

No.20

No.25

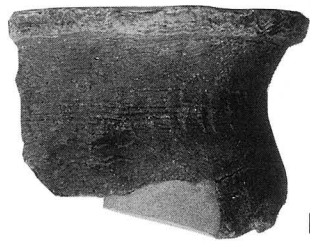


No.21



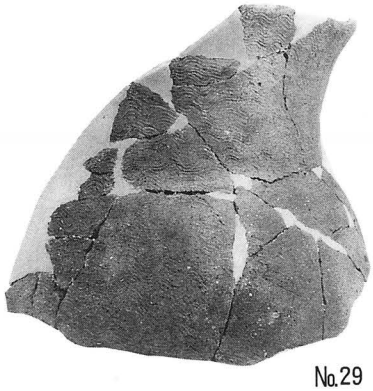
No.26

No.45



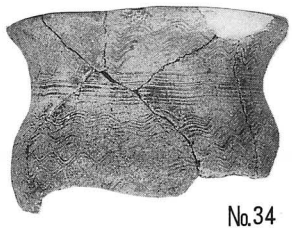
No.27

図版 6



No.29

No.38



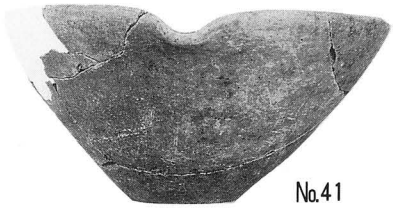
No.34

No.39

No.36

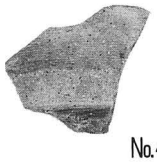
No.43

No.46

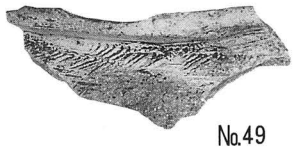


No.41

No.50

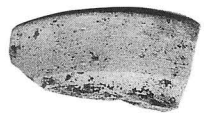


No.47

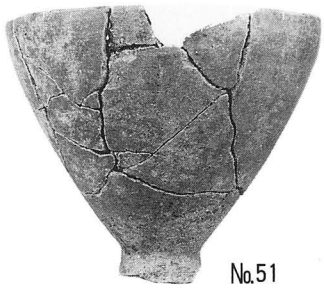


No.49

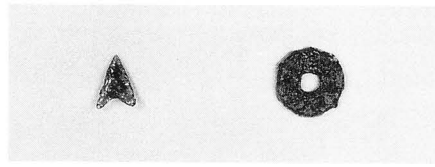
No.53



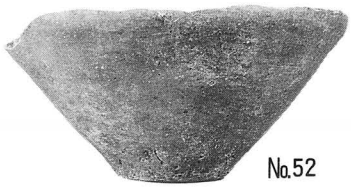
No.54



No.51

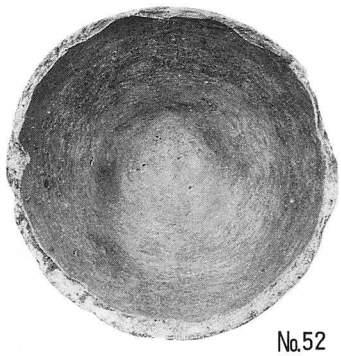


左 No.65　右 No.64

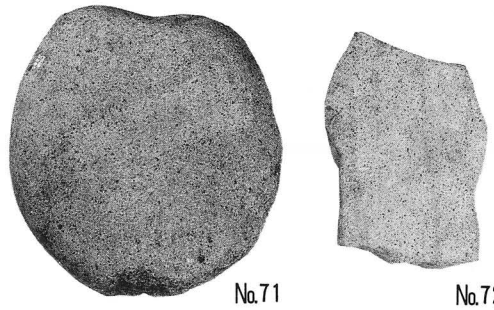


No.52

左上から No.66～70



No.52



No.71　No.72

上田市文化財調査報告書　第70集

宮　原　遺　跡

緊急発掘調査報告書

発　行　平成10年３月31日
発行者　創　価　学　会
　　上田市教育委員会
　　〒386-0025　長野県上田市天神2-4-74
　　☎（0268）22－4100
印　刷　株式会社上田ワードプロセス企画